11
380

笠岡所誌

始

11-380

帝國圖書館藏

岡町誌

高田義隆編
丸山株與
三神陳竜校訂

岡本文路堂發行

大正
9.10.8
内交

行遠

蕭菊

自近

八十八叟中洲題

光前

跋

丁巳一月中院題

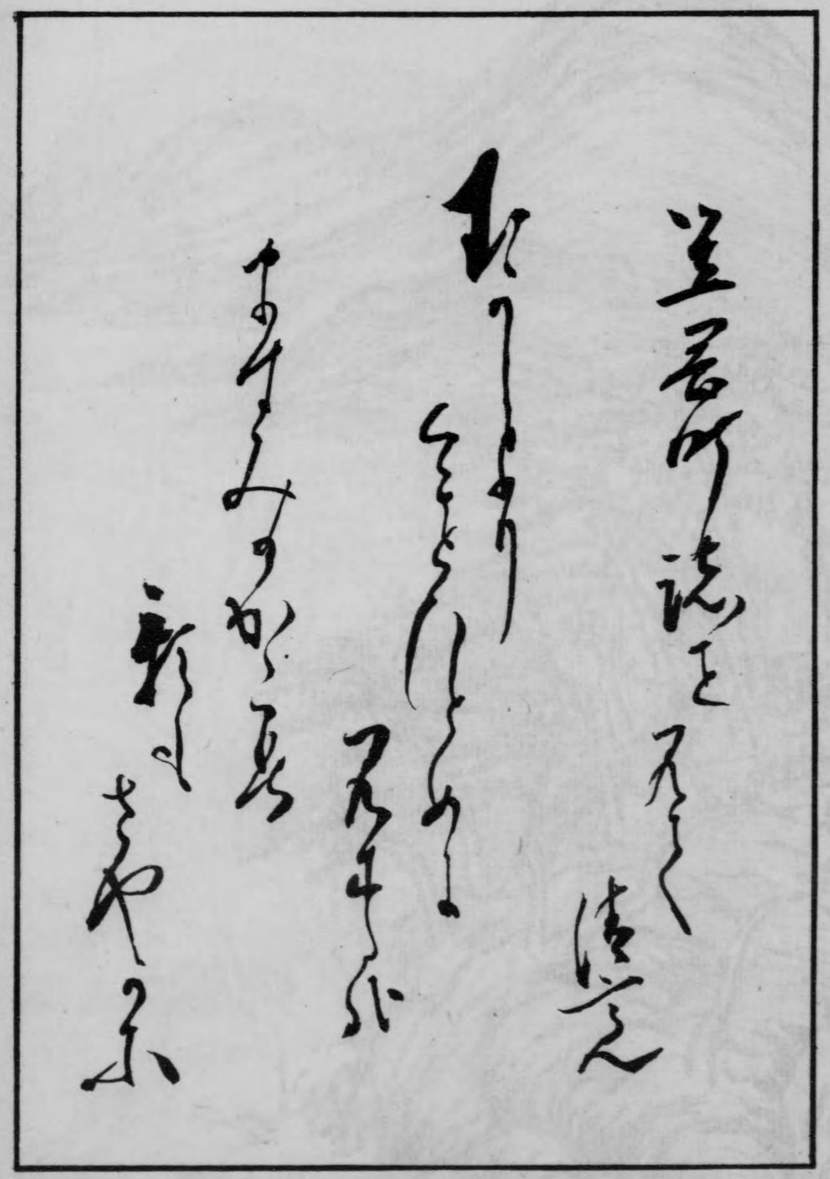
笠置町誌首

黄薇中山老書生

犬養毅

余ハ當國後月郡西江原村ノ産テ
アツテ余ノ生レタノハ今ヨリ五十四年前
文久三年ニテアル余ノ六歳ノトキ父カ
廣島藩ニ召抱ヘラレ笠岡ヨリ船出
シタノテ初メテ笠岡ヲ知リ海ト云フモノ
ヲ見タノテアル其ノ時ノコトヲ思ヒ出スト
今日ノ笠岡ハ實ニ非常ナル變化テアル
笠岡町誌ノ編纂者タル高田九郎君ヨリ
序文ヲ需メラレ余ハ世ノ變遷ト共ニ

一身上ノ変化ヲ考ヘ實ニ懐舊ノ情ニ
堪ヘヌノテアル此ノ所徒ラ読ム者ハ宜
シク古キヲ温ネ新キヲ知リ大ニ将来ニ
向テ奮發努力セサンヘカラサルコトヲ
アル一言以テ序ト為ス
大正六年一月　吉備　阪谷芳郎識



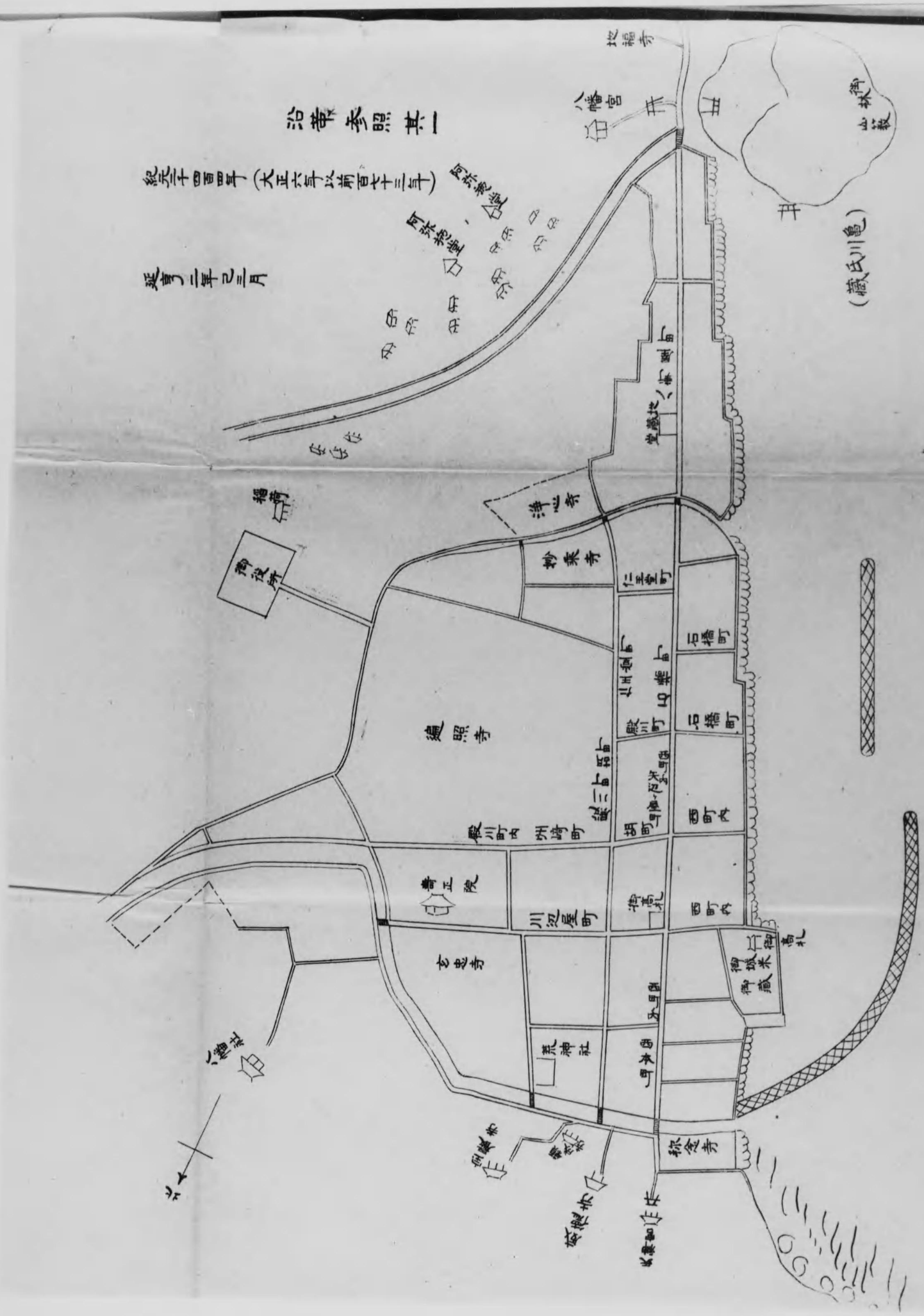
丁巳春日

笠岡町全圖
圖説市町區域
大井村
今井村
金浦町
大島村
神島内村
大事福島村
公園
山神廟
高丘山
三徳
龍王
139
168
205
209
230

沿革参照 其一

紀元二千四百年（大正六年以前百七十三年）

延享三年己巳月



沿革參照 其二
文化五戊辰春三月再改
紀元二千四百六十九年ニシテ大正六年前一〇八年當ニ
(亀川氏藏)
流神社
御法所
稲荷
八幡宮
行堂
地藏堂
荷稲
高羅宮
庵
田畑
須會所
亀川御藏元
八幡
吉祥院
昌泰院
觀音堂
觀音院
光孝寺
法華寺
本村

笠岡町誌編纂目次

第一章　地誌

一　位置、境界　一
二　廣袤　一
三　戸數、人口　二
四　地勢、地質　四
五　港灣　四
イ　笠岡灣　四
ロ　笠岡港　四
ハ　伏越港　五
ニ　富岡港　五

六 岬角
イ 金崎 五
ロ 龜首石 五
ハ 目 五
七 山岳
イ 應神山 六
ロ 古城山 六
ハ 龍王山 六
ニ 金崎山 七
ホ 高細山 七
ヘ 鳶ノ子山 七
ト 石槌山 七
チ 龍王山 七
八 河流、沼池
イ 隅田川 七
ロ 狼川 八
ハ 眞入川 八
ニ 宮地川 八
ホ 大谷川 八
ヘ 谷川 八
ト 今立川 九
チ 新池 九
九 氣候 九
第二章 政事、教育、神社、佛閣、宗教、交通
一 區劃 一〇

二　資力、財政　一〇
三　官公衙
イ　小田郡役所　一二
ロ　笠岡警察署　一二
ハ　笠岡税務署　一二
ニ　玉島區裁判所笠岡出張所　一三
ホ　笠岡郵便電信局　一三
ヘ　笠岡町役場　一三
四　教育
イ　學校ノ沿革　一三
ロ　就學狀況　一四
ハ　笠岡尋常高等小學校　一四
ニ　笠岡女子尋常高等小學校　一五
ホ　富岡尋常小學校　一五
ヘ　笠岡町立商業學校　一六
ト　笠岡町立實科高等女學校　一六
チ　幼稚園　一六
リ　私立福紡尋常小學校　一六
ヌ　甘露育兒院　一七
ル　笠岡文庫　一七
ヲ　笠岡消防組　一七
五　神社
イ　笠神社　一八
ロ　北八幡神社　一八
ハ　稲荷神社　一九
ニ　天滿神社　一九

ホ 高靇神社 一九
ヘ 住吉神社 一九
ト 稲荷神社 一九
チ 道通神社 一九
リ 粟島神社 二〇
ヌ 徳民於賀神社 二〇
ル 金刀比羅神社 二〇
ヲ 愛宕神社 二〇
ワ 御韓神社 二〇
カ 板倉神社 二〇
ヨ 木野山神社 二〇
タ 住吉神社 二〇
レ 石槌神社 二〇
ソ 若年神社 二一
ツ 大年神社 二一
ネ 惠日須神社 二一
ナ 稲荷神社 二一

六 佛閣

イ 光明山遍照寺 二二
ロ 光明山觀照院 二二
ハ 光明山吉祥院 二二
ニ 光明山西明院 二二
ホ 光明山南昌院 二二
ヘ 笠岡山威德寺 二二
ト 大巖山玄忠寺 二二
チ 佛性山海藏寺 二四

リ 海照山智光寺 二四
ヌ 大巖山壽正院 二四
ル 正岡山稱念寺 二四
チ 觀善寺 二四
ワ 願成寺 二五
カ 法性山淨心寺 二五
ヨ 大覺山妙乘寺 二五
タ 光明山地福寺 二五
レ 林光院 二五
ソ 雲碩庵 二五
ツ 吉導山本林寺 二六
ネ 月照庵 二六
ナ 藥師堂 二六

七 教會所
イ 黑住教笠岡教會所 二六
ロ 金光教笠岡教會所 二七
ハ 天理教笠岡分教會 二七
ニ 笠岡基督教會 二七
八 交通、運輸
イ 山陽線 二七
ロ 井笠輕便鐵道 二八
ハ 縣道 二九
ニ 一等里道 二九
第三章 生産業
一 商業、工業、農業、水産、林産

イ 工産物 三〇
ロ 農産物 三一
ハ 果實 三二
ニ 水産物 三三

二 工場、會社

イ 福島紡績株式會社笠岡支店 三三
ロ 山陽製絲合資會社 三三
ハ 笠岡ラムネ合資會社 三三
ニ 金水舍 三三
ホ 合資會社大島工場 三四
ヘ 精米所 三四
ト 備後水力電氣株式會社笠岡出張所 三四
チ 井笠輕便鐵株式會社 三四
リ 二十二銀行笠岡支店 三五
ヌ 山陽商業銀行笠岡支店 三五
ル 鴨方倉庫銀行笠岡支店 三五
チ 共益貯金株式會社笠岡支店 三五

第四章 名勝、遺跡

イ 古城山公園 三五
ロ 宗祇休石 三六
ハ 鏡石 三六
ニ 笠目山 三六
ホ 笠懸の松 三七
ヘ 神功井 三七
ト 兜岩 三七
チ 笠岡城趾 附陶山氏系譜 三八

リ　鳶ノ子城趾　三九
ヌ　小田縣廳蹟　四〇
ル　陣屋　四〇
チ　敬業館　四〇
ワ　六條御殿　四一
カ　富岡堤防　四一

第五章　人物

イ　井戸平左衛門　四二
ロ　立神清正　四三
ハ　芥川貞佐　四七
ニ　小寺清先（清之、廉之、雲松）　四八
ホ　高橋正澄　五〇
ヘ　瑞明僧正　五一

ト　關政方　五一
チ　畫人　五二
リ　小松爲仁　五二
ヌ　丸山株修（附株德）　五二
ル　森田佐平　五三
チ　森田思軒　五四
ワ　小川壽三郎　五四
カ　菰口巖　五五

第六章　人情風俗
第七章　沿革

笠岡町誌

編者　高田九郎
校訂　立神清亮
　　丸山株興

帝國圖書館藏

第一章　地誌

一、位置、境界

笠岡町ハ小田郡南部ノ海岸ニ沿ヒ東經百三十三度三十分北緯三十四度三十分ニ位ス

東ハ應神、石槌ノ諸山ヲ以テ今井村ニ接シ東南ハ淺口郡里庄村大島村及ヒ本郡神島内村ニ連リ西ハ金崎山、龍王山ヲ以テ金浦

町ニ界シ北ハ鳶ノ子、高細ノ二山ヲ以テ大井村ニ隣リ南一方ノミ海ニ面ス

二、廣袤

東西二十町、南北三十二町、面積一方里ノ四分一厘ナリ之ヲ段別ニテ表セバ

官有地	三十九町六反五畝廿五歩	
民有地	三百六十八町九段歩	
免租地	百六十一町	（保安林百四十八町一反ヲ含ム）
免租年期地	七町六段歩	
合計	五百七十七町一段五畝廿五歩	

更ニ民有地ヲ細別スレバ

田地	六十二町四段五畝廿五歩、八	
畑地	百九十五町六段一畝五歩	
宅地	十一萬六千八百二十五坪、九一	
山林	六十七町九段七畝十六歩	（保安林ヲ省ク）
其他	十四町五段六畝廿三歩	

ナリ

三、戸數、人口

（大正四年十二月末調）

戸數二千六百二十五戸ニシテ之ヲ職業別ニ示サバ左ノ如シ

		内專		兼	
商業	一四一七	七八〇		六三七	
工業	四四三	仝	二二三	仝	二二〇
農業	四一四	仝	二一四	仝	二〇〇
漁業	一〇	仝	七	仝	三
庶業其他	三四一	仝	二〇九	仝	一三二

人口壹萬貳千四百四十八人

男　五、九八六　女　六、四六二

本籍人口

男　五、六三三　女　五、七五八

本町へ寄留

他町村ヨリ

男　二三四　女　二二三　計　四五七

縣內他郡市ヨリ

男　五一九　女　六七九　計　一、一九八

他府縣ヨリ

男　三六二　女　四三一　計　七九三

合計男一、一一五　女一、三三三　二、四四八

本町ヨリ轉出

他町村へ

男　三三　女　三一　計　六四

縣內他町市へ

男　二一三　女　二二五　計　四三八

不明

男　四六　女　三一　計　七七

他府縣へ

男　四二九　女　三三四　計　七六三

合計男　七二一　女　六二一　一、三四二

囚人

男　二〇　女　一　計　二一

在朝鮮

男　一五　女　五　計　二〇

在臺灣

男	三	女	一
計	四		

在外國

男	三	女	一
計	四		

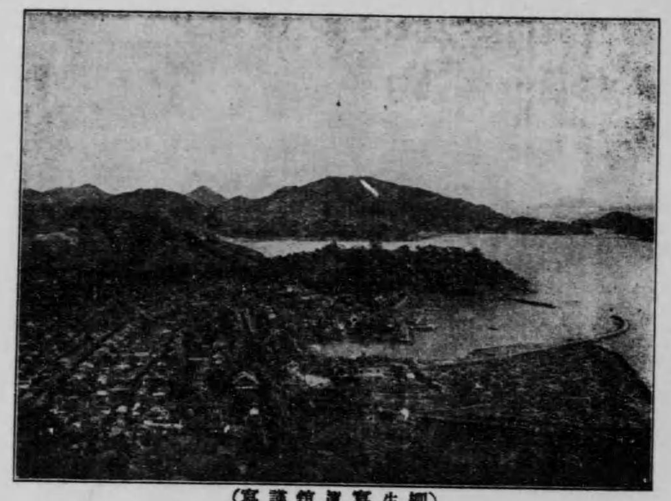
合計

男	七六三	女	六二九
計	一、三九一		

四、地勢、地質

本町ハ東西ニ短クシテ南北ニ長シ東北西ノ三方ハ殆ンド峰巒ニ圍繞セラルヽト雖モ甚高峻ナラズシテ其山腹ハ概ネ耕地タリ、地勢ハ北ヨリ漸次南ニ低下シ海岸ハ平坦ニシテ市街ヲナセリ

地質ハ太古層ニシテ花崗岩質ナリ土壤ハ其色概シテ淡黑ナル砂質壤土ニシテ稻雜穀等ニ適ス



（柳生寫眞館謹寫）

五、港灣

イ 笠岡灣

笠岡灣ハ茂平鼻ト神島見崎トヲ以テ其口ヲ扼シ灣入スルコト約三海里ニシテ外ハ即チ備後灘ナリ内ニ片島、木之子島等アリ、東ハ神島瀨戸ヲ以テ水島灘ニ通ス

ロ 笠岡港

笠岡港ハ古城山ノ西麓ニ在リ山陽鐵道布設ノ際港内ノ一部ヲ埋立テ更ニ港外ニ突堤ヲ設ケ海陸

運輸ノ便大ニ開クニ及ビ港灣ノ狹隘ヲ來シ明治四十一年擴張工事ヲ施セリ港内東西七十五間、南北百六十五間ニシテ西埠頭ハ長ク海中ニ突キ出ツルコト約三百間、東埠頭ハ六十餘間ニシテ先端ニ燈臺ノ設アリ、船舶常ニ出入シテ交通運輸ノ便頗ル多ク讃岐多度津、丸龜トハ僅ニ二十海里ヲ隔ツルノミナレバ金刀比羅宮參詣ノ旅客ハ多ク此港ヨリス、又近海ノ諸島嶼及ビ備後ノ福山、鞆津間ニハ定期航海アリ、然レドモ憾クハ港内水淺クシテ百五十噸以上ノ汽船ヲ容ルヽニ足ラズ、然レドモ官鐵山陽線ノ笠岡驛アリ、又井笠輕鐵ノ起點地ニ當レルヲ以テ陸上運輸ノ利便ト相竢チテ其港頭近時益々隆昌ニ赴ケリ

ハ 伏越港

伏越港ハ古城山ノ東麓ニアル小港ナレドモ神島、白石、北木、眞鍋等ノ諸島及ビ讃岐多度津間ニ小蒸汽船ノ定期航海アルヲ以テ近年大ニ盛運ニ向ヘリ域内ニ魚市場ノ設アリテ内海ノ魚介多ク此處ニ集マル

ニ 富岡港

富岡港ハ富岡灣ノ東北隅ニ在ル小港ニシテ近海航行ノ小船ヲ繫グニ過キズト雖モ多ク雜穀及ビ大原燒ヲ出ス

六、岬角

イ 金崎

金崎ハ笠岡灣内ニ突出セル一角ニシテ東笠岡港ト西金浦灣トヲ劃セリ、沿岸ハ昔ノ濱街道ニシテ金浦町ニ通ズ古此ノ邊リノ海ヲ金ノ浦ト稱ヘタリ

大宴會和歌集ニ後冷泉院永承元年十一月
木工頭兼文章博士讃岐權介藤原朝臣家繼ノ詠メル歌ニ

金の浦釣舟　おきつ風浪たつべきも布かぬよに
　　金ゝ浦より出つるあま舟

ロ　亀　ノ　首

亀ノ首ハ笠岡灣内ニ斗出シ横島港ト富岡港トヲ限レル岬角ニシテ近時此ノ岬端ヨリ伏越町眞角マデ新墾地ヲ拓カント劃策セリ

ハ　目　石

女石ハ笠岡灣内ノ淺斥中ニアリ暗礁ナリ、東西三十間、南北十五間、今ハ此處ニ圓錐形ノ標識ヲ設ケテ船舶ノ危險ヲ警ム、釣魚ノ候ニハコノ邊リニ釣ヲ垂ルヽモノ頗ル多シ

七、山　岳

イ　應　神　山　（笠目山トモ）

應神山ハ伏越町ヨリ富岡ノ北部ニ連ル一帶山脈ノ總稱ナリ、全山禿赭ニシテ啻ニ矮松ヲ生ズルノミ、山中ニ八丈岩又ハ夫婦岩ト稱スル巨岩アリ最モ高キ所二百十九米、往古應神天皇嘗テ此ノ地ニ行幸アリ一日狩獵ノ娯樂ヲ行ハセラレ給ヒシ所ニシテ此山ニ應神山ノ命名ヲナシ子孫ヲシテ不朽ニ其跡タルヲ忘レザラシメ以テ甘棠的敬意ヲ表スト云フ　（水明篇參照）

姓氏錄に云ふ笠朝臣孝靈天皇皇子稚武彦命之後也、應神天皇巡幸吉備國登加佐米山之時飄風吹放御笠、天皇恠之、鴨別命言、神祇欲奉天皇、故其狀爾、天皇欲知其眞僞、令獵其山、所得

甚多、天皇大悅、賜名賀佐云々

ロ　古城山

古城山ハ笠岡港ノ東、海中突起セル小丘ニシテ高サ六十八米、陶山氏、村上氏ノ城趾タリ、往古ハ吸江山ト稱ヘ應神山ト連續セシヲ伏越ノ地ヲ堀鑿シタリト云フ山頂ニ公園ヲ設ケテ遊覽ノ地トナセリ域内ニ招魂碑及陸地測量部ノ標石アリ西麓ノ海岸ヲ觀音鼻ト云フ

ハ　龍王山

龍王山ハ町ノ西方堂上ニアリ高サ百六十八米、金浦町ノ境ニ跨ル山頂ニ老松アリ樹下ニ龍王祠ヲ奉祀ス傍ニ金浦町西濱ニ通スル小徑アリ昔濱街道ノ未ダ通セザリシ當時ノ通路ナリキ

ニ　金崎山

金崎山ハ龍王山以南一帶ノ山脈ヲ總稱ス、南端ハ笠岡灣内ニ突出シテ金浦町トノ境ヲナセリ山麓ニ金崎隧道アリ長サ一千六百五十呎

ホ　高細山

高細山ハ字高細ニアリ高サ二百八米アリテ金浦町木ノ目ニ跨ル、山頂ニ陸軍陸地測量部ノ標石アリ滿山雜草叢生シテ樹木少シ故ニ牛馬ノ秣場トナス

ヘ　鳶ノ子山

鳶ノ子山ハ字鳶ノ子ト今井村大字園井トノ境ニ聳エ小見山氏ノ墨趾タリ高サ百三十米山腹ニ木野山神社アリ

ト　石槌山

石槌山ハ馬飼越ニ在リ巨岩奇石巍峩トシテ古松其間ニ點在ス山中所々ニ盲水晶アリ頂上ニハ石槌神社ヲ祀レリ高サ二百五米遙ニ四國及備後ノ諸山ト相呼應ス

チ　龍王山

龍王山ハ富岡ノ北ニ峙チ應神山ト相連亙ス頂上ニ龍王神祠アリ高サ百八十米餘

八、河流、沼池

細流ノミニシテ殆ンド川ト稱スベキモノナク平時ハ悉ク水涸ル

イ　隅田川

隅田川ハ字追分ノ新池ヨリ發シ鳶ノ子山ノ溪流ヲ集メ縣道ニ沿ヒ南下シテ狼川ヲ併ヒ川邊屋、殿川両町ノ間ヲ流レ正壽塲町ヲ過キ西ノ濱新田ニ至リ笠岡灣ニ注ク長サ千二百八十間

ロ　狼川

狼川ハ石槌山及ビ狼ノ溪流ノ集マレルモノニシテ町立商業學校ノ前ヲ流レ隅田川ニ入ル長サ百四十餘間

ハ　眞入川

眞入川ハ縣廳堀ヨリ發シ小丸ヨリ來ル小流ヲ併セ仁王堂町及ビ東本町、石橋町ノ間ヲ流レ未新田ニ至リ笠岡港ニ入ル長サ約二百間

ニ　宮地川

宮地川ハ應神山ノ北部宮地南平、小丸南平ノ諸溪流ヲ聚メ宮地伏越ヲ經テ伏越港ニ注ク長サ六百六十間

ホ　大谷川

大谷川ハ富岡字山畑ノ溪流ヲ集メ西南ニ流レテ富岡灣ニ注ク

ヘ　谷川

谷川ハ富岡字山畑ヨリ發シ笠岡富岡両字ノ境ヲ南流シ富岡灣ニ入ル

ト　今立川

今立川ハ本町ト今井村及淺口郡里庄村トノ間ヲ南流シ神島内村入江新田ニ至リ海ニ注ク

チ　新池

新池ハ追分ニアリ東西三十八間、南北百二間、周圍凡二百八十間隅田川ノ水源ニシテ田圃ノ灌漑ニ備フ

九、氣候

氣候温和ニシテ寒暑共ニ宜シキヲ得、極熱二十七度半、極寒五度平均十五度半ナリ、故ニ酷暑ト雖モ甚シキ熱サヲ感セズ沍寒ノ候亦凛烈ナラズ從ツテ降雪ノ如キモ頗ル少ナク寸餘ノ積雪ヲ見ルコト極メテ稀ニ雨量ハ毎年約千耗内外ナリ

第二章　政事、教育、神社、佛閣、宗教、交通、

一、區　劃

本町ヲ笠岡富岡ノ二大字トシ更ニ之ヲ五十ノ小字ニ分ツ

大字笠岡

西本町　石橋町　東本町（八軒屋）　伏越町
仁王堂町　殿川町　正壽塲町　川邊屋町
大磯宮地　濱田　古城山
古城山下　未新田　西ノ濱　西ノ濱新田
追分高細　水ノ内　水落
田頭大久保　八幡平　堂上
金崎鍋山　鳶ノ子　繪下谷
狼小丸　嘉入道　馬飼越

小丸南平　宮地南平

大字富岡

西町　中ノ町　東町　山畑
焼山　二丁目　三丁目　四丁目
五丁目　六丁目　七丁目　八丁目
九丁目　十丁目　小島屋　太兵衛新田

二、資力、財政（大正四年度調）

土地前ニ詳ナリ

地價　四十二萬五千三百七十八圓九十七錢
直接國稅　二萬六百三十五圓九十四錢
縣稅　一萬三千二百十六圓二十一錢

市町村稅　二萬二千九百四十五圓十二錢

町有財産

田畑　八畝十五歩
山林　二十一町一反五畝廿八歩
公園　四町七反四畝十三歩
學校敷地　一町九反五畝十八歩
其他　二町八畝九歩

建物

公共用地　六十九坪
役場　八十一坪
學校　千五百三十六坪

病院　百六十五坪

基本財産　一千九十圓

大正五年度歳入歳出　三萬九千九百五十三圓五十六錢五厘

歳入

町税	二二、三二〇円四二〇
國縣郡費補助金	四、一七八円〇四〇
使用料、手數料	一〇、五二二円〇六〇
其他	二、九三三円〇四五

歳出

役場費	四、三〇八円二九〇
會議費	三〇三円〇〇〇
土木費	四三五円二七〇
教育費	二七、四八六円八〇二
衛生費	二七五円〇五〇
救助費	一七八円八五〇
警備費	六六三円〇〇〇
諸税及負擔	一、三四七円九三三
雜支出	二九六円〇〇〇
財産費	六円〇〇〇
神社費	一八円五〇〇
豫備費	一〇〇円〇〇〇
臨時費	四、四六〇円八七〇
其他	七四円〇〇〇

三、官公衙

イ 小田郡役所

川邊屋町八幡平ニ在リ明治十二年（紀元二千五百三十八年）ノ設置ニ係ル、元ト威德寺ヲ以テ廳舍ニ充用セシガ燒失后明治三十三年六月今ノ所ニ建築シ郡内二十五ケ町村ヲ管轄セリ

ロ 笠岡警察署

石橋町ニ在リ明治十七年（紀元二千五百四十四年）七月ノ建築ニシテ分署ヲ矢掛町ニ置キ本郡内ノ警察事務ヲ掌ル

ハ 笠岡税務署

未新田ニ在リシヲ近年元笠岡區裁判所官舍内ニ移シ小田、後月両郡内ノ直接國税ニ關スル事務ヲ取扱ヘリ

ニ 玉島區裁判所笠岡出張所

字小丸ニ在リ元笠岡區裁判所ト稱シ刑事民事ノ訴訟ヲ裁斷セシガ大正二年三月玉島區裁判所ニ合併シ同所ノ出張所トナレリ今ハ唯登記事務ヲ取扱フノミ

ホ 笠岡郵便電信局（三等）

西本町ニ在リテ郵便電信事務ヲ取扱フ明治四十四年電話交換局ヲ併置セリ而シテ本町内ノ電話加入者ハ二百十七ナリ

ヘ 笠岡町役場

仁王堂町堀端ニ在リ元民家或ハ寺院ヲ充用セシガ明治三十三

年（紀元二千五百六十年）今ノ所ニ建築セリ

ト　鐵道院笠岡驛

交通ノ所ニ於テ詳說セリ

四、教育

イ　教育ノ沿革

寛政十一年（紀元二千四百五十九年）頃既ニ敬業館ナルモノアリテ經史ヲ講セシガ明治四年始メテ啓蒙社ト稱スル私立教育場ヲ設置シ明治五年（紀元二千五百三十二年）小田縣設置ノ際公立敬業小學ト改メ明治六年小田縣管下第九中學區一番小學校トナシ遍照寺、觀照院ヲ以テ教室ニ充テ普通教育ヲ施セシガ後笠岡小學ト改ム當時上等小學科、下等小學科ノ別アリ、仝十七年四月笠岡小學校ト改稱シ高等科、中等科、初等科ノ三程度ニ區別セリ

明治二十年（紀元二千五百四十七年）四月學制ノ改革ニ伴ヒ高等小學校並ニ尋常笠岡小學校ヲ設置セシガ富岡村合併ニヨリ仝二十二年九月富岡小學校ヲ尋常笠岡小學校ノ支校トナシ後分教場ト改メタリ仝二十六年十一月高等笠岡小學校ヲ笠岡町外十三ケ村組合立笠岡高等小學校ト改ム仝三十二年四月之ヲ廢シテ更ニ笠岡尋常高等小學校并ニ笠岡女子尋常高等小學校ノ二校ヲ設ク

明治三十八年四月笠岡尋常高等小學校ノ分教場ヲ分離シテ富岡尋常小學校ト稱ス

仝十八年四月尋常笠岡小學校ニ幼稚園ヲ附設セシガ仝三十二年四月之ヲ笠岡女子尋常高等小學校ノ附屬ニ移シタリ

此ノ如ク教育事業ハ時勢ノ進運ニ伴ヒ遂ニ中等程度ノ女學校ト商業學校トノ設立ヲ見ルニ至リ爾來駸々乎トシテ現時ノ盛

況ヲ呈セリ而シテ大正四年度ニ於ケル教育費ハ實ニ二萬七千餘圓ヲ計上スルニ至レリ

ロ 就學狀況（大正五年四月末調）

兒童＼學校		笠岡尋常高等小學校	笠岡女子尋常高等小學校	富岡尋常小學校	合計
學齡兒童	男	九〇七	八七四	一五〇	二〇七九
	女			一四八	
就學兒童	男	九〇四	八七一	一四九	二〇七二
	女			一四八	
就學猶豫	男	三	三		七
	女			一	
就學歩合	男	九九、六七	九九、六六	九九、三三	九九、六七
	女			一〇〇、〇〇	
尋常科兒童	男	七〇三	七〇八	一一四	一六四五
	女			一二〇	
高等科兒童	男	二四三	一〇八	―	三五一
	女				

ハ 笠岡尋常高等小學校

字小丸ニ在リ明治四年（紀元二千五百三十一年）ノ創立ニシテ初メ啓蒙社ト稱セシガ明治五年小田縣設置ノ際公立敬業小學ト稱ヘ明治六年小田縣管下第九中學區一番小學校トナシ後笠岡小學校ト改メ仝二十年四月尋常笠岡小學校ト稱シ仝二十二年九月富岡小學校ヲ合併シテ支校トス、仝二十六年十一月笠岡尋常小學校ト改稱シ富岡支校ヲ分教場トナセリ仝三十二年四月組合立笠岡高等小學校解散ニ伴ヒ高等科ヲ併置シ別ニ女子校ヲ設ケテ笠岡女子尋常高等小學校ト稱セリ、仝三十八年四月富岡分教場ヲ分離シ富岡尋常小學校ヲ設置セリ仝四十一年四月學制改革ニ伴ヒ尋常科ヲ六學年トシ高等科ヲ二學年トス元小田縣ノ廳舍ヲ以テ校舍ニ充テシガ仝三十年四月改築シ仝四十三年八月更ニ二棟ノ校舍ヲ增築セリ校地總坪數二千百四十二坪、兒童九百四十六人（大正五年四月末調）之ヲ十六學級ニ編成セリ

ニ　笠岡女子尋常高等小學校

明治三十二年（紀元二千五百五十九年）四月ノ設立ニシテ遍照寺、智光寺ヲ以テ臨時校舍ニ充テシガ仝三十四年六月現校舍新築落成ヲ告ゲ玆ニ移轉セリ仝四十一年四月學制ノ改革ニ依リ尋常科ヲ六學年トシ高等科ヲ二學年トス仝四十三年八月增築セリ校地總坪數一千九百四十五坪餘兒童數八百十六人（大正五年四月末調）ニシテ之ヲ十五學級ニ編成セリ

ホ　富岡尋常小學校

明治六年（紀元二千五百三十三年）ノ創立ニシテ元富岡小學ト稱セシガ仝二十二年九月尋常笠岡小學校（今ノ笠岡尋常高等小學校）ノ支校トナリ後分教場ト改ム仝三十八年四月分離シテ富岡尋常小學校ト名ク兒童數男百十四人女百二十人ヲ收容シ之レヲ五學級ニ編制セリ、校地坪數六百二十七坪ニシテ現校舍ハ明治二十九年四月ノ新築ニシテ仝三十八年度及四十三年度ニ於テ增築セリ

ヘ　笠岡町立商業學校

字狼ニ在リ明治三十五年（紀元二千五百六十二年）五月五日ノ創立ニシテ元山陽製絲會社ノ倉庫ヲ以テ假校舍ニ充用セシガ仝四十年八月今ノ所ニ新築セリ仝四十一年二月十九日組織ヲ變更シテ甲種程度ノ認可ヲ受ケタリ校地總坪數千三百九十二坪經費七千八百六十餘圓ヲ要セリ現今收容セル生徒數ハ三百卅人（大正五年四月末調）ナリ

ト　笠岡町立實科高等女學校

本校ハ元笠岡女子校ト稱シ明治三十五年（紀元二千五百六十二年）四月ノ創設

ニ係リ爾來女子ニ高等普通教育ヲ施スコト十一ケ年時勢ノ進運ニ伴ヒ大正二年四月組織ヲ變更シテ笠岡町立實科高等女學校ト改稱シ笠岡女子尋常高等小學校々舍ノ一部ヲ充用シ生徒三百人（大正五年四月末調）ヲ收容セリ大正五年四月字狼ノ地ヲ相シテ校舍新築ニ着手セリ敷地總坪數二千四十餘坪ナリ

チ　幼稚園

明治十八年（紀元二千五百四十五年）ノ創設ニシテ尋常笠岡小學校ノ附屬タリシガ仝三十二年四月笠岡女子尋常高等小學校ノ附屬ニ移シタリ現今幼兒二百餘ヲ保育セリ

リ　私立福紡尋常小學校

當會社雇傭ノ工女ニシテ未ダ義務教育ヲ了ヘザルモノ或ハ補習志望者ヲ收容シテ教授ヲ施セリ

ヌ　甘露育兒院

淨心寺境内ニ在リ貧孤兒ノ收容救濟ヲ目的トシ明治三十三年（紀元二千五百六十年）津田明導ノ創立セシモノニシテ元富岡本林寺内ニ在リシヲ仝三十九年五月二日今ノ所ニ移シタリ本院ハ感化救濟ノ成績頗ル良好ナルヲ以テ曩ニ内務省及ビ本縣ヨリ奬勵金ヲ下附セラレ且ツ連年郡費補助ヲ與ヘラル現今院兒數十名ヲ收容セリ

ル　笠岡文庫

本文庫ハ明治三十七年（紀元二千五百六十四年）十一月ノ創設ニ係リ笠岡尋常高等小學校内ニ置ケリ爾來一百餘ノ庫員ヲ有シ其年醵金並ニ

郡費、町費ノ補助ヲ受ケ年々新刊ノ圖書ヲ購入シテ一般公衆ノ閲覧ニ供フ大正四年度ノ如キハ閲覧人員一千有餘ノ多キニ達スルノ盛況ヲ呈セリ

ヲ　笠岡消防組

笠岡消防組ハ本町ヲ五部ニ分チ、各部定員ヲ百名トス其組織ハ各部ニ部長一名、小頭九名、消防手九十名トシ組頭一名ヲ置キテ其全部ヲ統率セリ當消防組ハ明治二十七年消防組規則ノ制定ニ依リテ其組織ヲ完了シ今ヤ縣下有數ノモノナリト云フ

五、神社

イ　笠神社

（柳生寫眞館謹寫）

應神山（加佐米山）ノ麓ニ鎮座セル村社（小田縣設置當時社格ハ鄉社ナリキ）ニシテ應神天皇ヲ祀ル上古笠臣命ノ勸請ナリト傳フ、永祿年間（紀元二千二百二十年代）吸江山（世俗城山ト云フ）城主村上氏累代當社ヲ崇敬シ社殿ヲ改築シテ祭祀ヲ嚴重ニシ永祿十三年八月十二日其式目ヲ定メ祭式及ヒ献饌ノ物品ヲ規定シ御供料米三石三斗、錢三貫三百文大御供料米拾石、錢拾貫文、白飯御供料米壹石八斗、銀參百六

十目仝參石六斗、銀七百三十目等ノ制ヲ設ク、其書今尚ホ祠官立神氏ノ家ニ所藏セリ其當時ハ八幡宮ト稱ヘシガ明治四年（紀元二千五百三十一年）社號ヲ笠神社ト復舊セリ

吉備津宮ノ末社帳（賀陽郡宮内ノ國造賀陽家ノ舊記ニシテ七八百年以前ノモノナリト云フ）ニ備中國ニ末社七十二アリ、其内ニ笠岡笠神社ノ記載アリ祭日ハ十月十二、十三両日ニシテ本町二千六百戸ノ氏神ナリ

社域ハ吸江山ニ對シ本町ノ市街ヲ眼下ニ眺メ汽車、汽船眞帆片帆ノ往來、鞆津及ビ水島灘、神島瀨戸ノ絶景一眸ノ裡ニ集ル、祠邊綠樹鬱葱トシテ笄ヲ曳クモノ頗ル多ク笠岡名所八勝ノ一ニシテ『八幡杜杜鵑』ト云フ詩歌ノ題名ヲ存ス

ロ　北八幡神社

八幡平ニ在リ應神天皇ヲ祀ル寛永三年（紀元二千二百八十六年）市民爭ヲ起シ東八幡宮ヲ茲ニ分祀セリト云フ

ハ　稲荷神社

字小丸ニ在リ倉稲魂神ヲ祀ル幕府代官ノ鎭守ニシテ一ニ陣屋稲荷トモ云フ

ニ　天滿神社

西本町龍王山下ニ在リ菅原道眞公ヲ祀ル境内ノ老松海風ニ嘯ク夏時ノ祭日ニハ參詣スル者頗ル多シ

ホ　高竈神社

古城山下ニ在リ高竈神ヲ祀ル元城山ノ西麓ニアリシヲ紡績會社建設ノ爲メ明治二十八年（紀元二千五百五十五年）今ノ地ニ移セリ町民ハ雷

避ノ神ト稱シテ崇敬ノ念厚ク境内ニハ櫻樹多シ

ヘ 住吉神社

未新田ノ海岸ニ在リ上筒男命ヲ祀ル夏時ノ祭日ニハ納凉ヲ兼ネ參拜スルモノ甚ダ多シ

ト 稲荷神社

古城山々腹ニ在リ宇賀御魂神ヲ祀ル城主村上氏ノ鎮守ニシテ今ノ殿宇ハ文化年間(紀元二千四百六十年代)ニ再建セシモノナリ域内ニ賜松庭ノ碑アリ

チ 道通神社

伏越町笠神社ノ祠官立神氏ノ邸内ニ在リ猿田彦命ヲ祀レリ

リ 粟島神社

正壽塲町龍王山下ニ在リ少名彦命、大己貴命ヲ合祀セリ縁結ビノ神ト唱ヘ婦人ノ參拜スル者頗ル多シ

ヌ 德民於賀神社

富岡字山畑ニ在リ境内老松蓊鬱タリ大國主命ヲ祀リ富岡ノ氏神タリ

ル 金刀比羅神社

正壽塲町龍王山下ニ在リ大物主神ヲ祀ル

ヲ 愛宕神社

伏越町應神山ノ半腹ニ在リ加具土神ヲ祀ル

ワ　御韓神社

正壽場町ニ在リ神功皇后ヲ奉祀ス

カ　板倉神社

仁王堂町板倉小路ニ在リ倉稲魂神ヲ祀ル

ヨ　木野山神社

鳶ノ子山上ニ在リ大山祇命ヲ祀ル

タ　住吉神社

古城山西方ニ在リテ上筒男命、中筒男命、底筒男命及ビ猿田彦命ヲ合祀セルモ社殿腐朽シ現今其礎石ヲ存スルノミ

レ　石槌神社

石槌山上ニ在リ藏王權現ヲ祀ル

ソ　若年神社

小丸稲荷神社ノ後方ニ、仁王堂町院ノ馬場ニ、繪下谷及ビ小丸ニ在リ何レモ若年神ヲ祀レリ

ツ　大年神社

宇田頭及ビ正壽場町ニ在リ大年神ヲ祀ル

ネ　惠日須神社　（或ハ蛭子神社、戎神社）

東本町、西本町、殿川、正壽場、伏越ノ各町ニ在リ事代主神ヲ祀レリ

ナ　稲荷神社

西ノ濱ノ新田ニ在ルヲ六道稲荷ト云ヒ西ノ濱ニ在ルヲ淺倉稲

荷ト云フ共ニ倉稲魂神ヲ祀レリ、而シテ六道稲荷神社ハ明治十七年ノ大海嘯ニ流失セシヲ以テ今ハ天滿神社ノ側ニ移セリ

（柳生寫眞館謹寫）

六、佛閣

イ　光明山遍照寺（本尊五大明王）（本寺嵯峨大覺寺末、御門跡也）

仁王堂町ニ在リ眞言宗（開祖宥順和尚）ニシテ陶山氏ノ菩提寺タリ應長元年（紀元一千九百七十一年）本郡吉田村山手ニ創建セシガ（其跡今ハ田畑トナリシモ尚遍照寺屋敷ノ名ヲ存セリ）元弘元年（紀元一千九百九十一年）陶山義高命シテ今ノ地ニ移セリ、幕府此地ヲ領スルニ及ビ慶長年中代官小堀作介亦命シテ觀照院、南昌院、吉祥院、西明院ヲ末寺タラシメ更ニ寺領三十五石（或ハ三十石トモアリ）ヲ賜付シテ維持ノ法ヲ確立セシム其他末寺十六箇寺アリ境内ニ御影堂（大師堂）浮屠堂

(仁王門)多寶堂(二重塔)鐘樓等アリ仁王門ハ元仁王堂町ニアリシガ置縣ノ際境内ヲ通路トナセシ爲今ノ所ニ移セシナリ二重塔ハ慶長十一年(紀元二千二百六十六年)住寺法印弘尊ノ建立ニシテ口碑ノ傳フル所ニヨレバ此ノ塔ノ落成ト豊臣氏滅亡ト其日ヲ同ジウセリトイフ(元和元年五月)又庭内滴翠ノ松樹アリ自ラ清淨靈尚ノ氣ニ富メリ

ロ　光明山觀照院　(本尊虛空藏)

眞言宗ニシテ遍照寺境内ニ在リ僧温智ノ開基ニシテ其年月ヲ詳ニセズ明治二年(紀元二千五百二十九年)四月二十五日祝融ニ罹リ仝五年秋再建セリ

ハ　光明山吉祥院　(本尊毘沙門天)

遍照寺境内ニ在ル眞言宗ナリ安永六年(紀元二千四百三十七年)僧秀英ノ開基ニシテ寺中ニ閻魔堂アリ

ニ　光明山西明院　(本尊阿彌陀如來)

遍照寺境内ニ在リテ眞言宗ナリ享保二十年(紀元二千三百八十七年)僧秀英ノ開基ニ係ル寺中ニ太子堂、聖子堂アリ

ホ　光明山南昌院　(本尊藥師如來)

眞言宗ニシテ遍照寺境内ニアリ由緒詳ナラズ

ヘ　笠岡山威德寺　(本尊釋迦牟尼佛)

當寺ハ八百九十年餘ノ古刹ニシテ龍王山麓堂上ニアリ能州惣持寺大源派船木山洞松寺末ニシテ曹洞宗ナリ元弘元年(紀元一千九百九十一年)

笠置山落城ノ時陶山藤三義高城中龍華堂ノ彌勒佛ヲ携ヘ來リテ安置セシ所ナリ享和二年（紀元二千四百六十二年）祝融ニ罹リ文化年中（紀元二千四百六十年代）再建セシガ明治三十一年（紀元二千五百五十八年）三月七日小田郡役所廳舍ニ充用中再ビ烏有ニ歸シ今ハ唯寺門ト鐘樓トヲ殘スノミ境内ニ井戸正明ノ墳墓アリ

ト　大巖山玄忠寺（本尊阿彌陀佛）

川邊屋町ニ在リ智恩院末ニシテ淨土宗ナリ往時ハ一宇ノ梵閣ニ過ギザリシガ永正元年（紀元二千百六十四年）僧徹公大ニ土木ヲ興シ今ノ堂宇ヲ建立セシモノニシテ鐘樓山門アリ本堂ノ側ニ祀レル大木像ノ大黑天ハ眼光烱々人ヲ射ル之レ乃チ弘法大師ノ作ニシテ元丸山久右衛門氏ノ邸内ニ奉祀セシヲ此處ニ移シ、ナリト又山門ハ龜川氏ノ寄進ニ係ルト云フ

チ　佛性山海藏寺（本尊智明權現）

川邊屋町闘場ニ在リ眞言宗古義派ニシテ遍照寺末ナリ別ニ大仙院ノ號アリ元祿元年（紀元二千三百四十八年）政範上人之ヲ創立ス伯耆國大山智明權現ノ分体ナリ庭裡ニ翁鬱タル翠綠ノ松ハ德川家用人杉佐渡守ノ奇進タリ寶永年中嘗テ火災ニ罹リ堂宇悉ク烏有ニ歸シ一時廢絕ノ姿ヲ呈セシガ元文二年橋野千右衛門之ヲ見テ大ニ慨嘆シ資財ヲ投シテ再建シ寺運復舊以テ今日及ブト云フ毎月（舊曆）二十三、二十四両日ノ緣日ニハ近鄕ヨリ善男善女ノ賽スル者非常ニ多ク町内之ガ爲ニ頗ル雜沓ヲ極ム

リ　海照山智光寺（本尊阿彌陀佛）

殿川町ニ在リ智恩院末ニシテ淨土宗ナリ往古西念寺ト稱シ勝

譽清賢ノ創立ニシテ慶長十九年（紀元二千二百七十四年）今ノ地ニ移シ、ナリ

ヌ　大巖山壽正院（本尊阿彌陀如來）

川邊屋町ニ在リ淨土宗ニシテ智恩院末ナリ元龜二年（紀元二千二百三十一年）正譽永運和尚（玄忠寺住職ノ當時）之ヲ建立セシモノニシテ境内ニ鐘樓アリ

ル　正岡山稱念寺（本尊阿彌陀如來）

西本町ニ在リ玄忠寺末ニシテ淨土宗鎭西派ナリ天正十年（紀元二千二百四十二年）阿波國德島ノ人然譽玉翁ノ建立ニ係ル玉翁在寺六十年寛永十九年（紀元二千三百二年）十月二十七日壽齡九十餘歲ヲ以テ遷化セリ

ヲ　觀善寺（本尊阿彌陀佛）

西本町ノ西端縣道ノ盡クル所ニ在リ玄忠寺末ニシテ淨土宗ナリ安永年中（紀元二千四百三十年代）僧眞譽ノ建立セシ所ナリ

ワ　願成寺（本尊千手觀音）

威德寺末ニシテ天文年中（紀元二千二百年代）威德寺住職玄圭和尚隨身ノ僧本跡庵ヲ此ニ結ビ塔司トナル後天正年間（紀元二千二百四十年代）龜川太郎左衛門曾テ子ナキヲ憂ヒ一子ヲ得ンコトヲ祈願セシニ願望成就セルヲ以テ一寺院ニ建立シ願成寺ト名ケ三十三体ノ佛像ヲ安置セリ今ハ建造物全部ヲ威德寺境内ニ移轉セリ

カ　法性山淨心寺（本尊阿彌陀如來）

濱田ニ在リ眞宗ニシテ慶長十年（紀元二千二百六十五年）津田善了之ヲ創立ス經堂、鐘樓アリ現今域内ニ甘露育兒院ヲ置ケリ

ヨ　大覺山妙乘寺（本尊日蓮大菩薩）

仁王堂町ニ在リ日蓮宗ニシテ大覺大僧正ノ開基ナレドモ年月ヲ詳ニセズ境内ニ妙見大菩薩ヲ祀レリ

タ　光明山地福寺（本尊地藏菩薩）

伏越町ニ在リ遍照寺末ニシテ眞言宗ナリ僧弘舞ノ開基ナレドモ年月詳ナラズ

レ　林光院（本尊不動明王）

濱田ニ在リ醍醐三寶院末ニシテ眞言宗ナリ

ソ　雲碩庵（本尊觀世音菩薩）

古城山ノ麓ニ在リ淨土宗ニシテ享保年中（紀元二千三百八十年代）僧天

頂ノ建立ナリ

ツ　吉導山本林寺（本尊阿彌陀如來）

富岡山畑ニ在リ眞宗ニシテ天明七年（紀元二千四百四十七年）十二月僧倫常之ヲ創立ス

ネ　月照庵（本尊彌勒菩薩）

富岡山畑ニ在リ眞言宗ニシテ寛政五年（紀元二千四百五十三年）僧性蓮ノ創立ニ係ル

ナ　藥師堂（本尊藥師如來）

伏越町ニ在リ藥師如來ヲ祀ル

七、教會所

イ　黑住教會笠岡教會所

伏越町ニ在リ祭神ハ天照大神八百萬神及ビ教祖宗忠神ニシテ明治九年（紀元二千五百三十六年）ノ頃初メテ本町ニ布教シ仝十一年説教所ヲ設ケ仝二十二年三月二十一日黑住教笠岡小教會所ト稱セシガ仝四十一年四月一日笠岡教會所トナレリ本部ハ御津郡今村（距岡山約一里）ニ設ケラル而シテ本教會所ハ明治十七年六月ノ新築ナリ

ロ　金光教笠岡教會所

宇宮地ニ在リ本部ハ淺口郡三和村大字大谷ニ置カル明治十六年（紀元二千五百四十三年）六月二日神道金光教會ヲ組織シ漸次發展シ仝三十三年六月十六日金光教ト稱スル獨立ノ教派トナレリ祭神ハ天地金之神ニシテ教祖金光大神ヲ併セ祀レリ

ハ　天理教笠岡分教會

田頭ニ在リ葦津大教會ノ分教會ニシテ明治二十四年（紀元二千五百五十一年）十月十日上原氏ノ創建セシ所ナリ天神地祇八百萬神ヲ祀ル毎年春秋兩度大祭ヲ行フ

ニ　笠岡基督教會

仁王堂町ニ在リ組合教會ニシテ明治十七年（紀元二千五百四十四年）三月六日ノ創立ニ依リ今ノ會堂ハ明治二十七年三月六日新築落成セリ

八、交通運輸

本町ハ陸ニハ山陽鐵道東西ニ横斷シ輕便鐵道南北ニ縱貫ス海ニハ笠岡港伏越港富岡港等アリテ備後及ビ四國地方ト連絡ヲ通ズ又國縣道及數條ノ一等里道ト市街里道トアリテ交通ノ至便至利實ニ海陸ノ要衝ニ當レリ

イ 山陽線（明治二十四年九月開通）

淺口郡里庄村濱中ヨリ來リ町ノ南部海岸ニ沿ヒ金崎隧道（長サ一千六百五十呎）ヲ貫キ金浦町西濱ニ至ル笠岡驛ハ笠岡港ニ接近シ水陸交通運輸ノ便ニ富ム大正三年神戸鐵道管理局ノ管下ニ屬シ荷物倉庫ヲ建築シ避難線ヲ附設セリ大正二年十一月陸橋ヲ架設シ仝三年三月驛ノ改築成ル

笠岡驛一日平均（大正四年度）

乘車人員	四百五十四人	賃金百八十二圓	
下車人員	四百五十四人		
積出荷物	八十七噸	賃金二百五十七圓	
到着荷物	九十七噸		

積出荷物ノ主ナルモノハ米、麥、食塩、雜魚、蒟蒻玉等ナリ

笠岡驛ヨリ各驛ニ至ル哩數

	哩分				
鴨方	五、四	金神	七、六	玉島	一一、五
倉敷	一七、二	岡山	二七、二	三石	五二、六
姫路	八二、二	神戸	一一六、三	大阪	一三六、六
京都	一六三、四	名古屋	二五八、一	靜岡	三七三、五
新橋	四九一、五	仙臺	七一〇、七	青森	九五〇、四

敦賀	二三八、六	舞鶴	二一八、八	山田	二四四、四
大門	四、四	福山	九、一	尾ノ道	二一、六
三原	二八、七	糸崎	二七、二	廣島	七三、五
宮島	八七、〇	岩國	九九、二	柳井津	一一九、一
德山	一四一、九	小郡	一六九、五	下ノ關	二一三、〇
金川	三九、四	津山	六二、五		

ロ　井笠輕便鐵道

起點タル笠岡町驛ヲ鐵道院笠岡驛構内ニ設ケ闤場驛ヲ八幡平ニ置ケリ西ノ濱、西本町、正壽塲、八幡平、大久保、田頭、追分ヲ經テ大井村ニ入リ吉田、新山、北川、木ノ子等ヲ過ギ井原町ニ達ス延長十二哩五鎖ニシテ本町ヲ通過スルコト二哩十六鎖ナリ本町ハ大井村トノ境ニ大井村驛ヲ置ク實ニ大正二年十一月ノ竣工ニシテ南北交通運輸ノ便、此ニ於テ大ニ開ケタリ而シテ近ク北川驛ヨリ分岐シテ矢掛町ニ達スル線路布設ノ計劃中ナレバ開通ノ曉ハ今一層ノ利便ヲ得ルナラン

笠岡町驛ヨリ

闤場驛	〇、七	大井村驛	二、二	吉田村驛	三、八
新山村驛	五、三	北川村驛	七、二	藥師驛	七、九
木ノ子驛	九、五	七日市驛	一一、三	井原驛	一二、一

ハ　縣道

一ハ淺口郡里庄村ヨリ來リ富岡、大磯、伏越、東本町、石橋町、西本町ノ諸町ヲ經テ橋西ノ觀善寺前ニ至リ金浦町ニ通ズル里道ニ接續セリ之レ卽チ備中濱街道ノ一部ニシテ本町ヲ横斷スルコト

二十八町餘

一ハ本郡小田村ヨリ來ルモノト後月郡井原町ヨリ來ルモノト大井村小平井ニ於テ相會シテ一條トナリ本町ニ入リ追分、田頭大久保、川邊屋町ヲ經テ西ノ濱ニ至リ東折シテ笠岡驛ニ通ズ延長凡二十七町餘アリ

一等里道

一ハ西本町ノ西端觀善寺ヨリ金崎ノ海岸ニ沿ヒ金浦町西濱ニ至ル

一ハ川邊屋町ヨリ八幡平郡役所ノ側ヲ過キ金浦町木ノ目ニ達ス

一ハ田頭ヨリ金浦町木ノ目ニ通ズ

一ハ追分新池ヨリ鍋山ヲ經テ今井村園井ニ達ス

一ハ田頭ヨリ繪下谷ヲ過ギ今井村今立ニ至ル

一ハ伏越町ヨリ宮地及小丸南平ヲ經テ今井村馬飼ニ通ズ

一ハ富岡西町ヨリ海岸ヲ經テ神島内村横島ニ通ゼリ

笠岡町ヨリ

神島外村　二里二十九町　白石外村ヨリ　三浬　飛島外村ヨリ　八浬

北木島　十一浬　眞鍋島　十三浬

小田村　三里三町　矢掛　四里十九町　井原　三里二十九町

高梁　十一里二十九町　成羽　十一里廿八町　新見　十七里三十町

第三章　生産業

本町ハ商業最モ盛ニ行ハレ街衢商店軒ヲ並ベ各種ノ物品ヲ販賣シ今ヤ益々隆盛ニ向ハントス而シテ工業、農業之ニ次キ漁業ヲ營ムモノ甚ダ少シ左ニ生産額ノ概略及ビ製産高ノ主ナルモノヲ掲グ

工業	一、六四五、四三五円	（大正三年度調）
農業	八九、三七四　（仝　上）	
畜業	二三、二三二　（仝　上）	
水産	四、二四六　（仝　上）	
林産	八一　（仝　上）	
今計	一、七六二、三六八	

イ　工産物　（大正三年度調）

綿糸	一七、〇〇〇、〇〇〇
生糸	一三〇、〇〇〇
木綿織	二五、〇〇〇
麥稈經木眞田	四七、九〇〇
酒類	六五、四〇〇
ラム子	三七、〇〇〇
醬油	八、六〇〇

ロ　農産物　（大正四年度調）

米	一八、〇八六円
麥	四六、三〇六　（大正三年度調）
大豆	五二
小豆	一四四
蠶豆	九〇

粟　六八
黍　一三〇
蕎麥　三六
甘藷　一七、三六〇
馬鈴薯　一四四
青芋　三五
漬菜　一、四四〇
蘿蔔　九、九〇〇
燕菁　三三六
牛蒡　八〇
南瓜　六〇（大正三年度調）
西瓜　一、四〇〇（全）
諸瓜類　一、〇〇〇（全）

茄子　一、四〇〇（全）
薄荷　一八二（全）
葉藍　一〇〇（全）
除虫菊　八五〇（全）
筍　九五（全）
高苣　四六（全）
水菜　一四四（全）
菠薐草　四〇（全）
芹　一三九（全）
欵冬　五〇（全）
葱頭　六〇（全）
草花　一二〇（全）

ハ 果實 （大正四年度調）

梅	七二円
桃	五七
梨	一〇二
柿	八七
枇杷	九〇
無花果	五〇
葡萄	三〇
夏蜜柑	三四
苹果	二〇
ネーブルオレンヂ	七
柘榴	一六

ニ 水産物

海松、沙魚、穴子、牡蠣等

二、工場、會社

イ 福島紡績株式會社笠岡支店

古城山下ニ在リ明治二十八年（紀元二千五百五十五年）四月ノ建築ニ係ル元笠岡紡績株式會社ト稱セシガ明治四十二年七月大阪福島紡績株式會社ノ支店トナレリ總錘數一萬四千三百五十二ニシテ男女工一千餘ヲ使役セリ而シテ一ケ年ノ製産高凡六十餘萬貫此價格約百七十餘萬圓ナリ目下増錘ノ計劃ニシテ既ニ工事ニ着手セリ

ロ 山陽製絲合資會社

小丸ニ在リ小田縣時代島田某ノ建設ニシテ其後屢々名稱ヲ變更セシガ明治三十九年（紀元二千五百六十六年）五月合資組織トナレリ工女百五十人許ヲ使役シ一ケ年ノ製産高一萬三千斤此價格約十三萬餘圓ナリ

ハ　笠岡ラムネ合資會社

元字小丸堀ノ内ニ在リ明治三十三年（紀元二千五百六十年）七月十八日ノ創設ニシテラムネ、ラムネサイダー、高等ラムネ、サイダー等ヲ製造シ一ケ年ノ製産額格凡三萬七千餘圓ナリ工場ノ狹隘ヲ告グルヲ以テ今ハ山陽製絲合資會社ノ前ニ移轉セリ

ニ　金水舍

西本町山陽商業銀行ノ裏手ニ在リ明治三十年（紀元二千五百五十七年）六月ノ創業ニシテラムネ製造ヲ主トシサイダーハ其二割ヲ占ム一ケ年ノ製造高約三十萬壜ナリト云フ而シテ本町ニ於テ製造セルモノハ何レモ品質良好ニテ評判頗ル善シ

ホ　合資會社大島工場

大磯ニ在リ木綿織物、蚊帳地等ヲ製造セリ織機六十餘臺ヲ据エ附ケ一ケ年約十二萬反ヲ産出シ西ハ九州地方ヨリ東愛知、新潟ノ各縣ニ販グト云フ

ヘ　精米所

本町ニハ精米所ノ設ケ甚ダ多シ、特ニ此地方ノ主産物タル裸麥ノ如キハ近來殆ンド精麥トナシ廣ク各地ニ輸送セリ

ト　備后水力電氣株式會社笠岡出張所

備后水力電氣ノ發電所ハ府中町ヲ距ル八里ナル蘆田川ノ上流御調郡諸田村大字小田字永野山ニ設置セリ府中福山両町ヲ經テ本町ニ至ル十七里ニシテ原動力六十五馬力目下需要電力ハ九萬四千八百三十九燭光ニシテ（大正四年八月調）西本町ニ出張所ヲ置ケリ本町ニ於ケル点燈數千三百二十餘戸其他工場ニ使用セル電力ハ百二十九馬力ナリ

チ　井笠輕便鐵道株式會社

西ノ濱ニ在リ大正元年ノ創立ニシテ笠岡井原間ノ交通運輸ノ業ヲ營メリ

リ　二十二銀行笠岡支店

西本町ニ在リ本店ハ岡山市ニアリ明治三十三年（紀元二千五百六十年）三月一日ノ創立ニシテ仝三十九年五月一日新築落成シ今ノ所ニ移レリ資本金百二十萬圓（本店ト共通）ナリ

ヌ　山陽商業銀行笠岡支店

西ノ濱ニ在リ岡山市ニ本店ヲ置ケリ明治三十三年（紀元二千五百六十年）八月十一日ノ開業ニシテ仝四十年二月四日此處ニ新築セリ資本金四十萬圓（本店ト共通）ナリ

ル　鴨方倉庫銀行笠岡支店

西ノ濱ニ在リ本店ハ淺口郡鴨方村ニアリ資本金十二萬圓ニシテ明治四十二年（紀元二千五百六十九年）二月此ノ地ニ開店セリ

ヲ　共益貯金株式會社笠岡支店

東本町ニ在リ大正二年九月ノ創業ニシテ資本金五十餘萬圓本店ハ岡山市ニアリ

第四章　名勝、遺跡

イ　古城山公園

（柳生寫眞館謹寫）

笠岡町ノ南隅瀬戸内海ニ瀕スル一孤丘ニシテ丘麓ハ殆ンド潮水ニ洗ハレ北ノ一方ノミ應神山ノ地脈ニ接セリ園域總テ一萬四千三百三十二坪山容溫雅ニシテ老松蟠鬱タリ東ハ一葦帶水ヲ隔テ、神島ト相對シ西南遙ニ備後ノ仙醉島ト相望ム波光瀲灩、數百ノ白帆ハ其ノ間ヲ往來シテ眺望頗ル絶佳ナリ更ニ遠ク圍繞セル中國四國ノ峰巒ヲ雙眸ニ收メ近ク本町ノ全景ヲ一望ノ裡ニ瞰下ス園内所々ニ亭ヲ設ケ樹ヲ備ヘ悠々自適天與ノ景趣ヲ掬スルノ便ニ供ス遠近ノ雅客節ヲ曳クモノ甚ダ多シ曾テ門田朴齋翁ノ賦セル詩アリ

新構何人鏟古丘　荆榛變引綾羅遊
遙山淡在秋雲外　宿雨徐開暮檻頭
諸勝最佳泉水島　大觀寧讓岳陽樓
吾來亦會忘皈去　不待纖々素手留

境内ニ招魂碑アリ

ロ　宗祇休石

古城山東部ノ中腹ニ在リ明應（紀元二千百五十年代）ノ頃飯尾宗祇行脚シテ此ノ山ニ遊ビ山海ノ景ヲ賞セシ時此ノ石ニ休息シタリト云フ其時ノ句ニ

山松の影や浮き見る夏の海

ハ　鏡　石

（柳生寫眞館謹寫）

宗祇休石ノ側ニ在リ圓形ニシテ花崗石ニテ作ル元祿ノ頃松尾芭蕉翁此山ニ遊ビ宗祇ノ休石ヲ見テ

世の中はさらに宗祇のやどりかな

テフ一句ヲ遺シタリト傳フ其句ハ此ノ鏡石ノ裏面ニ刻セリ

ニ　笠　目　山（加佐目山）

今ノ應神山ノ稱ニシテ往古應神天皇吉備國御巡幸ノ時鴨別命ノ勸ニヨリ此山ニ獵シ給フ獲ル所甚多シ天皇大ニ悅ビ鴨別命ニ名ヲ笠ノ臣ト賜ヘリト云フ後世臣ノ字ヲ誤リテ目トナシ此ノ山ヲ笠目山ト云ヘリトナン

正應大嘗會歌集ニ大藏卿隆博ノ詠メル歌ニ

あめが下かさめの山ゝ草木まて
春のめくみに露そあまねよ

ホ　笠　懸　の　松

笠神社下段磴道ノ側ニアリシガ明治七年夏故ナク自ラ枯死セリ幹ノ周圍一丈四尺枝幹蜿蜒トシテ祠官立神氏ノ屋上ヲ覆ヘリト云ヘリ往古應神天皇ノ獵シ給ヒシ時飄風御笠ヲ吹放シ此ノ松ニ落チ懸リタルヲ以テ此名アリト今ハ唯其跡ヲ止ムルノミ

ヘ　神　功　井

關政三千ぬし云吾鄕笠岡の北邊りに追分といふ所有そこに神功井といひ傳ふる泉有古しへ神功皇后の筑紫より登りませし時此泉にて御裳をすゝぎましゝ所也其時に應神天皇も抱きましてはしましゝ故に後に此里に八幡の大神を齋ひ祭りて其山を應神山と名付けたりといひ傳へたり云々

此神功井ナルモノ縣道改修當時埋沒セリト云フモノアリ或ハ鬼子母神山ノ南鍋山ノ麓ニ清泉滾々トシテ湧キ出ヅル所アリ里人之ヲ勝負川ト呼ベリ或ハコレナラン乎トモ云ヘリ未ダ確說ヲ聞カズ

ト兜岩

宇上田頭荒神原ニ在リ高サ約一尺五寸周圍五尺許ノ自然石ニシテ其形恰モ兜ノ如シ往古應神天皇此地ニ御巡幸ノ時此岩ニ御兜ヲ脫ガセ給ヒシモノナリト里人稱シテ兜岩ト唱ヘ注連飾シテ之ヲ崇拜セリ

チ笠岡城趾

古城山ニ在リ永祿年中（紀元二千二百二十年代）村上隆重ノ居城タリ天正三年其子景廣及ビ毛利元康モ亦此ノ城ニ居タリ後幕府ノ代官小堀新介同作介等相繼デ此處ニ住セリ又元和二年（紀元二千二百七十六年）池田備中守長幸ノ居城タリシコト三年ニシテ上房郡松山ニ移レリ此ニ至ツテ城壘ヲ廢スルニ至ル

吉備物語に世傳に曰村上名は八郎左衛門字は景廣父は隆重其先は村上天皇の後胤久留島の餘流伊豫國野間郡の人海賊を好とかん始は笠岡浦十七貫しるよしして後には八ケ村を領し毛利に屬して一千石の役を勤むとかん、小田物語に天

正十八年に八郎左衛門景廣縫殿を笠岡に生ず慶長四年に音戸（私ニ曰ク周防國小畑トイフ處）へ所替にて行く、播州上月城攻及備前蜂濱合戰等に隆景に隨ふて行し事陰德記に見ゆ

小田物語に毛利大藏卿元康は備後深津の城主たりしが笠岡の城を望まるゝに付慶長四年村上彈正景廣を藝州小畑へ千石にて所替へさせたり是を村上領とて笠岡八ケ村を知行し毛利へ千石の役をつとめ來れる故也其跡へ元康移り住て魚渚を西濱へ所替させ獵師ども打寄要害の爲に城を拵んと企て侍れども其年關が原の役起りて其儘に止けりとかゝ

陶山氏系譜

（前ヲ畧ス）

義高　陶山藤三後備中守　永仁二年午二月四日生（紀元一千九百五十四年）

陶山ニ在城ス義隆采邑巡檢ノ節笠岡村ニ無雙ノ城地アリ因テ實檢ノ上城廓ヲ創建シ笠岡山ノ城ト稱シ陶山城ヨリ當城ヘ移住ス云々

高盛　陶山五郎後稱田邊將監　（義高ヨリ三代）

兄義高ニ從ヒ笠置山ノ城乘込三番目二千五十餘人ノ一人也其後京合戰ノ節兄義高ヨリ笠岡山城在番ヲ被命警衛ス云々

高詮　陶山又太郎　應安五子年四月七日生（紀元二千三十二年義高ヨリ六代）

明德元庚午年横島鳴ケ端ノ砦ヲ要害堅固ニ修覆シ即チ笠岡山ノ本城ノ端城トシテ云々

高雅　陶山刑部　應仁二戊子年七月十五日生（紀元二千百二十八年）（義高ヨリ十代）

永正三丙寅年讃岐國細川賴春ノ五男讃岐守滿氏備中國ヲ掌握セント先ツ其海岸ニ在ル所ノ笠岡山ノ城ヲ攻落シ之ヲ根城トシテ其國ヲ平定ス云々

乃チ一族村上滿兼ヲ爲大將三千餘騎兵船五十餘艘當城ニ押

シ寄セ取リ圍ム折柄疫疾盛ニ流行シ爲之城中ノ士卒此症ニ罹リ大半患者タリ壯健ノ者不滿百人依之高雅長臣等ト議シ使者ヲ遣ハシ開城ノ旨ヲ申入ル滿兼許之於是用金器財ヲ夫々臣下ニ分與シ思ヒ思ヒニ牢浪シ身ヲ潛ム高雅ハ神島自性院ニ落入リテ暫ク寓居ス云々

是ニ因テ見レバ陶山氏亦此ノ城山ヲ居城ト爲シ、モノ、如シ

「小寺清先日ク西濱ハモト笠岡村ノ枝村ナリシヲ以テ笠岡山城トハ矢張リ陶山城ノコトナラント」

然レドモ陶山氏系譜ニヨレバ陶山城ヨリ笠岡城ニ移レリト記セリ未ダ確說ヲ得ズ

リ 鳶ノ子城趾

鳶ノ子山上ニ在リ建武年中（紀元一千九百九十年代）鎌倉麾下小見山左衛門ノ據守セシ壘趾ナリト云フ

ヌ 小田縣廳

舊幕ノ代官役宅ヲ廳舍トセシモノニシテ其跡笠岡尋常高等小學校トナレリ今ノ堀ノ內ハ當時縣廳ノ屬舍ノ在リシ所ニシテ今ノ校門ハ元ト都窪郡茶屋町ニ在リシヲ置縣ノ際茲ニ移セシモノナリ門前ノ大道ハ今尙ホ縣廳道ノ稱アリ

ル 陣屋

幕領時代代官ノ役宅ニシテ規模頗ル宏大ナリシガ今ハ男子尋常高等小學校ノ校庭ト化シ常ニ咿唔ノ聲ヲ聞ク

ヲ 敬業館

龍王山下八幡平ニ在リ寛政年間（紀元二千四百五十九年）時ノ代官早川八郎左衛門正紀之ヲ建設シ小寺清先ヲシテ經史ヲ講ゼシメシ所ナリ後清先ノ子廉之孫雲松西南臺金田邃所等相續ギ子弟ヲ教養セリ、館ハ東南ニ向ヒ繞ラスニ塀ヲ以テセリ門ヲ入レバ左右ニ寮アリ寄宿生ノ起居スル處門ノ正面ニ一棟アリ是レ講堂及家族ノ起居セシ所講堂ノ入口卽チ門ノ正面ニ玄關アリ天地三尺許幅一間餘ノ板ニ館ノ名ヲ彫刻セル扁額ヲ掲グ書体ハ隷書ニシテ尾藤二洲翁ノ筆ニ成レルモノ講堂ハ疊二十餘枚ヲ敷ケリ外ニ三四ノ室アリ是家族ノ私室ニシテ隔ツルニ壁及襖ヲ以テセシガ今ハ本町教育ノ淵源タリシ此校舍モ取毀タレテ田園ト化シ只二基ノ碑（一ハ早川氏ノ恩德之碑一ハ小寺檜園先生之碑）空シク建ツルノミ

恩德碑銘

吾早川君諱正紀字子綱稱八郎左衛門寛政丁未爲吾笠岡令又宰作州久世爲人公正忠厚仁恕愛物而有毅然弗撓之節其治民先教後刑勤儉以率之誠信目待之民不忍欺之也作之舊俗貧民或生子不擧君嚴禁止之諭目父子之道俗得以革歲時行部輙聚民訓告遂興學二縣政化大行丁巳夏有旨錫金帛目賞異績特增其所管吏民歡呼如聞父母之慶事享和辛酉還任東武民群送有欄道號哭者文化戊辰冬病卒訃至莫不痛恨今十五年矣、父老猶追慕不已於是相議樹碑頌德屬筆於清先不才承乏鄉校有不可遜避者乃敢爲之銘曰政不擾民務在愛利乃驅之善建庠二氓之倥侗悟目天倫育其呱々父子會任誘導有道磨瑳有漸情農既勤奢去天其儉稅恐後人服弗慙朴昔之

號寒今則衣六輿誦日輿厥馬東首溫客在目道愛在口
君之猶存民奠復借君之既亡望之靡獲礲斯石兮勒斯
銘兮石則有磷德永馨子

文政七年歲在甲申冬十有二月朔備中小寺清先撰

飽國　賴襄書　并篆額

ワ　六條御殿

大磯ニ在リシナリ今ノ大島工場ノ邊リナリト維新ノ始京都六條院ノ僧某ノ住ヒシ所ナリコノ僧眞角ヨリ富岡灣ヲ埋立テ新開地ヲ爲サント企劃セシモ事ナラズシテ遂ニ屠腹セリト云フ

カ　富岡堤防

富岡街道ヨリ丁字形ニ南、神島内村及ビ淺口郡大島口ニ通ズル長堤ニシテ長サ三百四十四間元祿年中（紀元二千三百五十年代）時ノ領主備後福山水野美作守茲ニ堤防ヲ築キ灣入セル海水ヲ堰キ良田三十四頃ヲ拓キタルモノニシテ領民ノ其恩惠ニ浴セル實ニ偉ナリト謂フベシ

第五章　人物

イ　井戸平左衛門

正明ハ通稱ヲ平左衛門ト云ヒ世々幕府ノ臣タリ寛文十二年（紀元二千三百三十二年）江戸ニ生ル爲人忠愛ニシテ仁慈ノ心ニ富ミ資性寛篤人其ノ風ヲ慕フ元祿元年歳十七仕ヘテ小普請役トナリ仝十年表大番ニ進ム享保十六年（紀元二千三百九十一年）九月二日代官ニ任ゼラレ當地ニ來リテ備中、備後、石見ノ三ケ國ニアル幕領ヲ支配セラルヽヤ常ニ領内ヲ巡視シテ下民ノ窮苦ヲ察シ賑恤ヲ行ヒ之レガ救治ニ努ム時ニ領内タル石見ハ磽确ノ地多ク穀禾稔ラズ恰モ凶歳交々至リ細民ノ餓莩道ニ

（柳生寫眞館謹寫）

横ハルモノ頻々トシテ甚ダ慘狀ヲ極ム正明大ニ之ヲ憂ヒ甘藷ヲ移植セシメテ其ノ急ニ備フ遠近亦之ニ倣ヒ年ヲ經ルニ從ツテ益增殖シ再ビ凶年ヲ知ラザルニ至ル士民共ニ其恩惠ヲ敬仰シテ芋代官、芋殿樣ト云フ偶々石見國地方風雨順ヲ失シ害虫發生シテ秋穀皆無ナリ窮民爲メニ唯々トシテ餓死ヲ待ツ而已正明以爲クコレ尋常ノ手段ニテハ到底賑恤ノ道ナシ若カズ非常策ヲ講ゼント卽チ上司ノ允裁ヲ經ズシテ直チニ倉廩ヲ開キ貢米ヲ發シテ賑恤ヲ行ハシム屬僚後患ノ其身ニ及バンコトヲ怖レテ之ヲ諫止ス正明曰ク汝等ノ知ル所ニアラズトナシ强テ之ヲ行ハシメ且其ノ年ノ田租ヲ免ズ農民神ノ如ク崇敬ス然レドモ事專斷ニ出ヅルノ咎免ルベカラズトシ事情ヲ具シテ事後ノ承諾ヲ求ム實ニ享保十七年秋季ノコトナリキ翌十八年夏五月幕府命アリ笠岡ノ陣屋ニ於テ後命ヲ待テト正明乃チ以爲ラク

コレ必ズ譴責ヲ免レズ生キテ汚辱ヲ蒙ランヨリ寧ロ死シテ武士ノ面目ヲ保ツニ如カズト其ノ子正武ニ遺命シ屠腹シテ死ス（享保十八年五月二十八日）享年六十又二泰雲院義岳良忠居士ト法諡シ威徳寺境内ニ葬ル後幾ナラズシテ幕府ヨリ承認ノ命下リ且臨機ノ處置其宜シキヲ賞シ郡代ニ昇任シ正ニ他ニ榮轉セシムルノ命アリキト

是ニ於テ石見領民ハ深ク其徳ヲ慕ヒ一祠ヲ建テ、英靈ヲ祀リ歳時祭祀ヲ怠ラズ長シヘニ報恩ノ道ニ出ヅト云フ

明治四十三年十一月十六日特旨ヲ以テ從四位ヲ贈ラル（岡山縣人物傳參照）

口立神清正（姓ハ藤原）

從五位下佐渡守藤原朝臣清正ハ伏越八幡宮ノ祠官月宮清宣ノ長子ニシテ神主兼別當タリ天資温厚篤實ニシテ國典ヲ修メ和歌ヲ善クス兼テ神社ノ荒廢ヲ憂ヒ社殿ヲ改築セリ現今ノ神祠卽チ是ナリ後櫻町天皇ノ御宇明和二年（紀元二千四百二十五年）八月從五位下ニ叙セラレ佐渡守ニ任ゼラル

（御綸旨寫）

口宣案

上郷平中納言

明和二年八月一日　宣旨

藤原清正

宣敘從五位下

藏人頭左中辨藤原伊光奉

口宣案

上卿平中納言

明和二年八月二日　宣旨

從五位下藤原清正

宣任佐渡守

藏人頭左中辨藤伊光奉

藤原朝臣清正

右可從五位下

中務修其祝嘏致敬明神
言念精誠抽
榮爵式光祠
主者施行

可褒進宜授
壇可依前件

明和二年八月一日

一品行中務卿職仁親王宣

從四位上行中務大輔臣藤原朝臣光村奉

從四位上行中務小輔臣藤原朝臣兼敦行

正二位行權大納言臣兼胤

正二位行權大納言臣長淵

正二位行權大納言臣季晴

正二位行權大納言臣實榮

正二位行權大納言臣輔忠

從二位行權大納言兼右近衛大將臣重長

從二位行權大納言臣家孝

從二位行權大納言臣賞季

從二位行權大納言臣隆前

從三位守權大納言臣　雅重
正二位行權中納言臣　時行
從二位行權中納言臣
從二位行權中納言臣　宗城
從二位行權中納言臣
從二位行權中納言兼右衛門督臣
從二位行權中納言臣
正三位行權中納言臣　有榮
正三位行權中納言臣
正三位行權中納言臣　愛親　等言
權中納言從三位臣
制書如右請奉
制附外施行謹言

制可

明和四年六月十日

月晨時從五位上行大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師資
左中辨伊光

攝政從一位朝臣
大政大臣　闕
從一位行左大臣朝臣
從一位行右大臣朝臣
內大臣正二位兼行左近衛大將朝臣
二品行式部卿家仁親王
正二位行式部大輔家長
參議正四位上兼行左大辨
告從五位下藤原朝臣清正奉

制書如右符到奉行

從四位上行式部少輔光時

大錄

少錄

少錄

明和二年八月一日

從五位下藤原朝臣清正

從二位權中納言平朝臣時行

宣奉　勅件人宜令任

佐渡守者

明和二年八月二日　大外記兼權頭酉中原朝臣師資　奉

備中國小田郡伏越八幡宮神主藤原清正

今度從五位下佐渡守

勅許冥加之至也彌國家安全之御祈禱

可抽精誠者

神道啓狀如件

明和二年八月六日

神祇管領長上從二位卜部朝臣

天明二年（紀元二千四百四十二年）七月九日病ヲ以テ歿ス享年六十有一

ハ　芥川貞佐

芥川貞佐ハ葛原親王ノ子高見王ニ起リ其二十五代ノ孫中川原八郎左衛門資繼初メテ芥川ヲ稱フ貞佐ハ丸山久右衛門ノ子ニシテ幼名ヲ川吉ト云ヒ桃緣齋ト號ス爲人卓犖不羈幼ヨリ諸藝ニ心ヲ寄セ才思穎敏ニシテ吾師ト賴ミタル人ヲバ尊崇シ一小冊ニ其教ノ旨趣ヲ詳記シテ以テ他日ノ遺忘ニ備フ名ケテ乞食袋ト題ス弱冠ニシテ伊藤東涯ニ親炙シ親義別序信ヲ修メ飛鳥井家ニ詣デ、蹴鞠ヲ學ビ紫下紐ヲ免サル四條家ニ於テハ鯉鶴ノ庖丁ヲ研ギ禮家ニ依リテ諸禮儀式粧飾ヲ知ル三絃ハ野崎檢校ノ門ニ聞キ尺八ハ明暗寺ノ徒ニ問フ其他點茶挿花圍碁雙六亂舞連歌俳諧狂歌卜筮等ノ術盡ク修メザルハナシ性快淡產ヲ治メズ父之ヲ憂ヒ屢々戒ムレドモ聞カズ因テ之ヲ追フ貞佐之ヨリ諸國ヲ遍歷シ或ハ傭人トナリ或ハ炊夫ヲ勤メ或ハ輿丁トナリ或ハ別業ノ番人トナリ有ラユル艱苦ヲ嘗メ未曾テ父ヲ怨マズ到ル處藝術ヲ以テ人ヲ驚カシ特ニ得意ノ狂歌ヲ咏ジ人ヲシテ頤ヲ解カシム其名ヲ問ヘドモ語ラズ後勘當ヲ許サレテ家ニ歸ルヤ勘當ノ時父ノ與ヘシ二百両ノ金ヲ封ノ儘返ヘシタリト云フ後家ヲ繼ギ久右衛門ト稱ス會々安藝國廣島ノ人芥川孫右衛門其家柄ヲ望ミ舍弟株豊ヲ養子ニ乞フ貞佐卽チ家ヲ弟ニ讓リ自ラ往イテ其家ヲ繼ギ名ヲ久五右衛門ト改メ家父ノ勤メタル町方ノ長役ヲ繼グ時ニ年三十、元來無慾ニシテ慈愛ノ心深キ氣質ナレバ常ニ人ヲ救ヒ又財ヲ散ジテ毫モ意ニ介セズ行雲流水只其命ヲ樂ム老後其姪ニ家ヲ讓リ別業又生庵ニ閑居シ狂歌ヲ咏ジ自ラ樂ム門人一千餘人一時其盛ヲ極ム既ニ死ノ近キニアルヲ知リ左ノ一首ヲ歌フ

死て行く處はおかし佛護寺の

犬の小便する垣ぬもと

（龍源山佛護寺ト云ヘルニ葬レバナリ）

泰然自若最モ靜肅ニシテ其死ヲ迎ヘント欲シ堅ク覺悟スル所アリキ而シテ時ハ來レリ安永八丁亥歲（紀元二千四百三十九年）正月二十一日病テ歿ス享年八十又二狂歌ノ撰集多シ辭世ニ

一枝の花に笑ふて死て行く
跡にて花か笑ふこやこちやしらん
知らぬ所は佛ありけり

六十一の賀のとき　六進の一こはねたる花の
賀はちさこも匂ふ梅の十露盤

（畸人傳參照）

小寺清先

（清之、廉之、雲松）

通稱常陸介楢園ト號ス父ヲ清續豊前守ト稱シ世々其邑稻荷神社ノ祠官タリ幼ニシテ穎悟八歲ニシテ能ク大字ヲ書ス資性至孝父歿スルニ及ビ喪ニ居ルコト禮ニ過グ寛政十一年（紀元二千四百五十九年）病ノ故ヲ以テ祠官ヲ子清之ニ讓リ次子廉之ヲ挈ヘテ龍王山下ニ廬ス時ノ代官早川八郎左衛門鄉黌ヲ興シ敬業館ト名ケ清先ヲシテ茲ニ經史ヲ講ゼシム清先人トナリ卓偉明亮雅正温厚ニシテ曾テ情容アリシコトナク子弟ニ接スルヤ和ニシテ狎レズ親ンデ亂レズ敢テ怒ヲ他ニ移セシコトナシ特ニ和歌ヲ善クシ其什積ンデ數千首ニ至ル楢園集乃是ナリ其他著作頗ル多シ文政十年（紀元二千四百八十七年）六月二十六日病ンデ逝ク年八十館後ニ葬ル子廉之孫雲松相續イテ子弟ヲ敎ユ何レモ詩文ニ精通遺墨今尙ホニ世ニ存セリ

高島　鴎おく吉備の高島浦さひて
聖の御世のむかしおもほゆ　清先

富士山　いのちあり高きこと問ひしのねも
箱根のうみに見もこと答へん　清之

海閣秋觀萬里濤　持將餘興訪文豪
入門先覺人先在　二屐嵩楷語響高

望海樓宴罷　訪賴子成生長氏之宅　廉之

天神祠　松梅靈異且休論　七字遺篇欲斷魂
恩賜御衣終不朽　餘香長自滿乾坤

雲松克襄

舟中寄懷笠岡小寺帶刀　賴山陽

幾簇海灣魚稻鄉　蘸潮粉壁閃殘陽
故人家在何邊岸　頻喚梶師問笠岡

ホ　高橋正澄

上房郡松山ノ産ナリ通稱ハ元右衛門後剃髪シテ殘夢ト改ム清園又ハ有所遊居ノ號アリ丸山株周ノ女婿ニシテ當地ノ宿老役兼庄屋ヲ勤ム曾テ高橋屋茂左衛門ノ爲メニ領主龍野侯ニ讒セラレ其家産ヲ沒收セラル時文政五年ナリ因テ大阪ニ出デ、立賣堀ニ居リ後大川町浮世小路ニ移寓シ國學ヲ敎フ人ト爲リ學ヲ好ミ幼ニシテ歌ヲ鴨祐爲ニ學ビ又香川景樹ノ門ニ出入ス其大阪ニ在ルヤ常ニ京都ノ風光ヲ夢想シ綿々トシテ忘ル、能ハズ久シク移住ノ志ヲ抱ク然レドモ來訪スルモノ多ク門弟亦之ヲ止メテ果サズ晩年明ヲ失フ常ニ和歌ヲ咏ジ自ラ書ス嘉永四年（紀元二千五百十一年）二月二十七日終ニ歿ス年八十有七天滿專念寺ニ葬ル其著ハス所

（岡山縣人物傳參照）

清園詞草　心月詞花帖　續心月詞花帖
やまとよしき　からよしき　清園後草
靈の宿　國語本義　言靈古言考
言靈名義考　記紀物名考　万葉物名考
神名考　皇統稱名考　神詠製歌考
古今六躰考　國字定原　假字直道
石上枕辞例　三代枕辞例　万葉縫結抄
万葉詞林抄　同東語考　同國語考
同國字辨解　同創解　古今六帖未考解
歌仙家集新正　言靈字義考　字音大辨
字音大概　縫結大概　窓霰
合鏡　友鏡　夕月夜
記紀縫結抄　万葉地名抄　三代地名抄

記紀万葉　塵室草露

等頗ル多シ男熊彦嗣ノ名ハ正純、萱園ト號ス亦香川景樹ノ門ニ學ビ家學ヲ傳フ

殘雪　鶯はまた音もせぬ白川の
かはそひ山路雪そ殘きる
山深くおもひ入てもおく鹿の
こゑの身にしむ秋かせそ吹

へ瑞明僧正

遍照寺第三十一世ノ住職ニシテ詩歌及書畫ヲ善クシ七遷庵ト號ス安政四年二月五日寂ス享年七十四歳（今其詳傳ヲ得ザルヲ遺憾トス）

ト關政方

關鳧翁ハ關藤藤陰ノ兄ニシテ字ハ士常、號ヲ葭汀、又ハ嘉平田舍ト名ヒ金浦町吉濱ニ生ル曾テ京都村上伊豆守ニ從ヒ醫術及漢學ヲ修メ後此ノ地ニ於テ醫ヲ營ム和漢ノ學ニ通ジ國詩ヲ善クス春風消息、傭字例等ノ著アリ晩年ニ至リ弟藤陰曾テ儒臣ヲ以テ阿部伊勢守ニ仕フ城主ノ將軍家ニ出仕ノ際着用セラレシ官服ヲ拜領セシガ後藤陰又之ヲ鳧翁ニ贈レリ因テ之レニテ一種ノ服ヲ調ヘ鳧衣ト稱シ自ラ鳧翁ト云フ鳧衣ノ色ハ鵬色ニ地ハ塩瀨ニシテ紫ト白トノ染分ケノ紐ヲ附ケタリ然レドモ節日ノ外ハ用ヒズ平常質素ヲ旨トシ鼠金巾ノ衣ニ黑キ紐ヲ附ケタルヲ用ヒシトゾ（醫學博士井上通泰氏ト丸山氏トノ往復文參照）

水鳥の名におふ衣打きつゝ
鳧の翁と人によはれん

萬延二年（紀元二千五百二十一年）正月二十二日逝去ス年七十六古城山ノ西麓ニ葬ル墓表ハ丸山琴里ノ筆ニシテ墓碑ニ自筆ノ辞世アリ

我か魂の行へはいつく白雲の
立たむ山邊の松の下陰

チ畫人

畫人トシテハ辻鳳山、小野澹庵等アリ何レモ湛能ニシテ遺墨今尚ホ多ク世ニ存セリ特ニ備中名勝考ノ挿繪ノ如キハ鳳山ノ揮毫ニ係レリ

リ小松爲仁

肥後國熊本藩士赤松氏ノ第三子ニシテ名ハ恕字爲仁北辰堂ト號ス幼ニシテ長崎ニ遊ビ蘭學ヲ修メ大阪ニ於テ醫ヲ業トセリ後此ノ地ニ來リテ姓ヲ小松ト改メ西本町ニ居ス故ニ今尚ホ小

松小路ノ名ヲ殘セリ資性磊落ニシテ義俠心ニ富ミ慈善ノ心厚ク其名遠近ニ著ハル貧者來診ヲ乞ヘバ匙ヲ投ジテ直チニ往キ曾テ藥價ヲ收メズ却テ食料寢具等ヲ惠與セリ、又富者ノ診ヲ需ムレバ容易ニ往カズ家人之ヲ勸ムレバ曰ク他醫アリ吾行クニ及バズト偶々往診スルコトアレバ輿ニ乘リ從者ヲ具シテ行キ藥價ヲ倍收シテ以テ貧窮者ヲ救ヘリ文久元年（紀元二千五百二十一年）二月歿ス年五十三淨心寺ニ葬ル遺命シテ遺書ヲ以テ棺ニ充タスナド其他畸行多シ

ヌ　丸山株修（モトノブ）　附株德

字ハ子行通稱ヲ久右衛門ト云ヒ琴里ト號ス寛政五年（紀元二千四百五十三年）三月十二日笠岡ニ生ル早ク父ヲ失ヒ長兄株厚ニ養ハル爲人温厚篤實ニシテ威嚴アリ幼時書ヲ京都ノ上田蘭畹ニ學ビ終身不廢好デ王獻之其他古法帖ヲ學ベリ壯年ノ頃ヨリ和歌詩作ヲ嗜ミ學ハ賴山陽、小寺廉之ヲ和歌ハ木下幸文、菅沼斐雄、高橋正澄、關鳧翁等ヲ友トセリ株修ノ姉榮子ハ高橋正澄ノ室タリ故ヲ以テ正澄ノ浪華ニアルヤ株修モ亦京阪ニ學遊シ常ニ正澄ニ代リテ其子弟ヲ教訓セリ株修壯ヨリ宿老役ヲ勤ムル前後廿有餘年ナリ老後益々國詩及書道ヲ研鑽シ遺墨ノ世ニ存スルモノ多シ慶應二年（紀元二千五百二十六年）九月七日病ヲ以テ逝ケリ年七十五當時文教甚ダ盛ニシテ學者ノ輩出セル左ノ一首ヲ見テ察スルニ餘アリト云フベシ

けうとやあ笠岡まちの書畫會は
琴里もあれは雲松もあり

男株德名ヲ文藏、熊八郎、久太郎、亦久右衛門ト稱ス天保五年（紀元二千四百九十四年）七月十八日ヲ以テ生ル資性温良誠實寡言ノ君子ナリ長ズ

ルニ及ビ漢學並ニ國詩ヲ關亮翁ニ學ブ終生詠歌ヲ樂ミ四時ノ風物ニ對シ懷ヲ述ブ遺稿數冊今尚ホ其家ニ存セリ初メ加冠ニシテ文藏ト稱シ宿老役ヲ勤メ苗字帶刀ヲ差許サル爾後多年宿老役ヲ勤メ明治五年四月笠岡村戸長被申付後小學校長又ハ學務委員トナリ勤務多年、同十六年十二月文部省ヨリ敎育上勤勞ノ故ヲ以テ康熙字典及ビ詩繪硯箱ヲ下賜セラル明治二十九年八月推サレテ本町長ニ在職シ同三十二年三月病ヲ以テ職ヲ辞セリ本町會ハ爲メニ感謝狀ヲ贈リ其勞ヲ彰セリ明治四十二年（紀元二千五百六十九年）二月十六日溘焉トシテ逝ケリ時ニ歲七十有六

ル　森田佐平

森田昌興字ハ秀甫通稱ヲ佐平ト云フ幼ニシテ文學繪畫ヲ嗜ミ三逕居士ト號ス資性溫厚誠慤親ニ仕ヘテ至孝、友ニ交ハル信義篤シ且平生儉素ヲ尚ブ然レドモ貧困ナル者ヲ見バ財囊ヲ傾ケテ之ヲ賑ヒ毫モ吝惜セズ曾テ本町ノ名譽職ヲ務メ或ハ郡吏トナル後選バレテ縣會議員ニ擧ゲラレ常置員トナリ推サレテ縣會議長トナル明治十九年窪屋郡長ニ就職スルニ及ビ勵精治ヲ圖リ更ニ町邨區劃ノ整頓、兒島灣工務ノ監督、高梁川ノ土木等皆條理有リテ庶民其慶ヲ稱ス仝二十四年五月閭鄕ノ紳士倉敷町山陽亭ニ慰勞ノ宴ヲ張リ肖像ノ畫ヲ贈ル仝二十六年一月十日病デ歿ス享年五十九

ヲ　森田思軒

森田文藏ハ佐平ノ長男ニシテ思軒又ハ白蓮庵主ト號ス幼ニシテ興讓館ニ入リ坂田警軒ニ從ヒ漢籍ヲ修ム强記夙ニ詩文衆ニ秀ヅ後東都ニ遊ビ慶應義塾ニ入リ英書ヲ學ブ著作家、飜譯家、批

評家トシテ明治ノ詞壇ニ其名ヲ知ラレ著書ニ新聞ニ雜誌ニ平生ノ蘊蓄ヲ傾倒セシガ會々天津條約ノ締結セラレントスルニ際シ報知新聞社ノ用務ヲ帶ビ渡清シテ探報ノ事ニ從フ萬朝報社ニ入リ大ニ驥足ヲ展ベントスルニ當リ可惜疫ニ罹リテ歿ス年三十七時明治三十年（紀元二千五百五十七年）十一月十四日ナリ著書多ク世ニ行ハル

ワ　小河壽三郎

立神智ノ次男ナリ、智ハ高竈神社ノ祠官ニシテ本町普通教育ニ從事スルコト三十餘年德望甚ダ高シ壽三郎幼ニシテ笠原ヲ冒ス資性溫厚着實ナリキ福山中學校卒業後一年志願兵ヲ以テ明治二十七八年戰役ニ際シ征清軍ニ從ヒ各地ニ轉戰シテ功アリ陸軍歩兵少尉ニ任ゼラレ後小河氏ヲ冒ス仝三十三年北清事變ノ際出征中功ヲ以テ中尉ニ昇進シ從七位勳五等ニ叙セラル明治三十七年（紀元二千五百六十四年）八月二十一日病ヲ以テ歿ス年三十二

カ　菰口　巖

武人軍ニ從フ素ヨリ生還ヲ期セズ唯一死以テ君恩ニ報ズルノ覺悟アルノミ其國難ニ殉スルモノ素ト之レ軍人ノ常聊カ以テ其ノ本分ヲ完フシタル所以ノモノ又敢テ異トスルニ足ラザルナリ然リト雖モ死ヤ人生ノ一大恨事ナリ是ヲ以テ死生ノ間ニ於ケル行動ハ其ノ人物ノ眞價ヲ評量スベキ好尺度タルモノナリ

巖本姓ハ後藤明治九年十二月三十日ヲ以テ廣島縣雙三郡八幡村ニ生ル天資温厚寡言ナリ父ヲ武三郎ト云フ後本町菰口卯八郎ノ養嗣子トナリ其女ト配ス明治二十五年九月廣島第二尋常中學ニ遊ビ汲々トシテ黽勉特ニ數理ノ學ヲ研鑽シ常ニ軍籍ノ人タランコトヲ望ミ學業ノ餘暇柔道擊劍等ヲ修メ大ニ其身心ヲ鍛フ仝三十一年三月中學ノ業ヲ卒ルヤ笈ヲ負フテ帝都ニ上リ明治法律學校ニ學ブ尋テ翌年菰口家ヲ嗣グニ及ビ仝年十二月、一年志願兵ヲ以テ第五師團歩兵第四十一聯隊ニ入リ翌三十三年十一月期滿テ歸鄉ス翌年四月陸軍歩兵少尉ニ任ゼラレ亞テ正八位ニ叙セラル仝三十七年偶々日露國交斷絶スルヤ仝年五月征途ニ上リ清國貔子窩ニ上陸シ得利寺、蓋平、海城、大石橋等ニ轉戰シ七月三十一日拆木城占領ノ際左背ニ銃創ヲ被リ野戰病院ニ收容セラル、創痍纔カニ癒ルヤ切ニ請フテ遼陽ノ大戰ニ參加シ敵壘ニ肉薄シテ猛然突進中不幸飛丸アリ來ツテ胸部ヲ貫キ遼陽城頭ノ露ト化セシム時明治三十七年九月三日享年纔カニ二十有八即日功ヲ以テ功五級金鵄勳章年金三百圓及勳六等單光旭日章ヲ下賜セラル（誠忠錄參照）

第六章　人情、風俗

舊幕時代天下直領ノ地タルヲ以テ質實任俠ノ氣慨ニ富ミシガ近年水陸共ニ交通至便ノ結果四圍ノ影響ヲ蒙ムルコト甚シク且商工業ノ發展ニ伴ヒ幾多人士ノ集散ハ稍モスレバ輕佻浮薄ニ流レ易ク或ハ虚飾ヲ衒フ薄志弱行ノ徒ト化シ從ツテ堅忍不拔ノ氣象ヲ消磨スルノ傾キナキニ非ラズ然レドモ實利的ニシテ慧敏ナリ

第七章　沿革

太古ノ事攷フベカラズト雖モ遠キ古ヨリ此ノ邊ヲ吉備國ト稱セシコトハ既ニ國史ニ明カナリ、神武天皇東征ノ途次吉備ノ高島ニ行宮ヲ造リ駐マリ給ヒシコト八年（或ハ日三年）其ノ間此地方ヲ治メ給ヒシナラン後崇神天皇ノ御代四道將軍ノ派遣アリシ時孝靈天皇第四ノ皇子吉備津彦命御弟稚武彦命ト共ニ此地方ヲ鎮メ給フ應神天皇ノ御宇國造縣主ヲ置クニ及ビ此ノ地方ハ川島縣（今ノ淺口郡地方）ニ屬セシモノ、如シ又應神天皇此地ニ狩リシ給ヒシ時其臣鴨別命（淺口郡鴨方村村社鴨神社祭神ナリ）ニ笠ノ臣ノ姓ヲ賜ヒ此ノ邊リヲ笠臣國ト云ヒ子孫世々笠臣國造タリシト國造本紀ニ見ユ笠臣ハ孝靈天皇ノ皇子稚武彦命ノ後ナリト云フ

孝德天皇大化ノ新政ニ依リ國司郡ヲ置クニ及ビ國府（國府トハ國司ノ政務ヲ執ル官廳）ヲ今ノ吉備郡總社町ニ設ケ此地方ヲ統治セリ鎌倉時代ニ至リテハ妹尾兼康、土肥實平、梶原景時等相續デ此地方ノ守護職タリ元弘年中（紀元一千九百九十一年）高橋英光上房郡松山城ニ據ルニ及ンデ此ノ地ノ守護トナル足利尊氏叛シテ山陽道ヲ徇フルニ及ヒ高師秀ヲ守護トス天授年中（紀元二千三十五年）細川頼之守護ヲ兼ネ弟滿之、子基之、滿重相續グ文明、明應ノ頃（紀元二千百五十年）莊元資三谷村猿掛城ニ在リ毛利氏ニ屬シテ此地ヲ領ス天文二年（紀元二千百九十三年）莊爲資之ヲ繼グ

其後永祿年中（紀元二千二百二十年代）正親町天皇ノ御宇村上彈正隆重ノ領地トナルニ及ビ吸江山（城山）ニ城キ居ル其子八郎左衛門尉景廣亦之ヲ領セリ慶長四年（紀元二千二百五十九年）ニ至リ毛利元康代テ之ヲ領セシガ關ガ原ノ役ニ際シ毛利氏幕府ニ降リ其封土ヲ削ラルヽニ及ビ幕府代官小堀新介、仝作介ヲ遣ハシ元和二年（紀元二千二百七十六年）

ニ至ル迄十六ケ年間之ヲ統治ス仝年八月池田備中守長幸ノ領トナル元禄元年（紀元二千三百四十八年）ヨリ仝十年ニ至ルマデ備後福山城主水野美作守ノ領地タリ仝十一年ヨリ再ビ幕府直轄代官ノ支配ニ歸セリ

明治元年（紀元二千五百二十八年）大政奉還ノ結果廣島藩主淺野侯之ヲ鎮撫セリ仝四年七月十四日倉敷縣ノ管轄ニ属セシガ仝年十一月十五日此地ニ深津縣ヲ置キ仝年六月二日小田縣ト改ム仝八年十二月十五日廢縣トナルニ及ンデ岡山縣ノ所轄トナリ仝二十二年六月一日富岡村ヲ合併シ仝二十四年十月笠岡村ヲ笠岡町ト改稱セリ

自叙

余曾て本村の地理歴史を考へその方式に倣ひ毎事之を慨せり茲に浮屠義手を於て子弟を教育し或は古文に照し或は古老に質し或は口碑乃伝を斟酌し之をかい老人の御ら之を育成の一編に供せんとす此地人士の参考に資する杜撰大方の嗤笑を免れざるなり且

11
380

大正六年四月三日印刷
大正六年四月八日發行
（非賣品）

岡山縣笠岡町
編者　高田九郎

岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡二五一七番地
發行者　岡本文一郎

岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡二〇二三番地
印刷所　三益舍印刷所

岡山縣小田郡笠岡町中之町
發行所　岡本文明堂

複製
不許

[illegible]

大正六年丁巳孟春月

[illegible]

終